

MITIS Journal

VOL. 3 NO.2

MAY 2023

MIZUNO INSTITUTE FOR TRANSLATION
AND INTERPRETING STUDIES

MITIS Journal Volume 3 No.2 (2023)

目次

復刻・対訳・評釈

復刻・対訳(順送り訳)・評釈の試みーペンヤミン『写真小史』

三ツ木道夫 1

資料

書肆春陽堂刊『伊曾保物語』「序詞」と「伊曾保物語の考」ー解題と翻字

北代美和子 23

エッセイ

エドガー・アラン・ポー『アッシャー家の崩壊』の翻訳比較 (II)

水野 的 29

投稿規定

51

編集後記

54

復刻・対訳(順送り訳)・評釈の試み 1

三ツ木道夫

KLEINE GESCHICHTE DER PHOTOGRAPHIE

写真小史

Von Walter Benjamin

ヴァルター・ベンヤミン 筆

„Die Literarische Welt“ Nr.38, 7. Jahrgang

「文学世界」第7巻 38号

Freitag 18. September 1931

1931年9月18日 金曜日

Der Nebel, der über den Anfängen der Photographie liegt, ist nicht ganz so dicht wie jener, der über den Beginn des Buchdrucks sich lagert; kenntlicher vielleicht als für diesen ist, daß die Stunde für die Erfindung gekommen war und von mehr als einem verspürt wurde; Männern, die unabhängig voneinander dem gleichen Ziele zustrebten: die Bilder in der camera obscura, die spätestens seit Leonardo bekannt waren, festzuhalten.

語彙

der Buchdruck:書籍印刷術 / sich lagern:横たわる、設営する / kenntlich:見分けやすい、明白な kenntlicher で比較級となる / verspüren:感じる、察知する verspürt werden で受け身 / zustreben 3格または auf 4格で、～を目指して進む

人名・用語解説

camera obscura:「カメラ・オブスクーラ」(ラテン語の原義は「暗い部屋」)。写真機の前身。ピンホール・カメラの原理により外界の映像を「暗い部屋」の中に映し出す。ピンホールの部分にレンズを用いることで、映像は鮮明になり器具自体も小型化されていった。ゲーテの小説『親和力』(1809)にも「携行できる暗い部屋 eine tragbare dunkle Kammer」として登場する。 / Leonardo:レオナルド・ダ・

ヴァンチ(1452-1519)ルネサンス期の万能的な芸術家、科学者。

文法注釈

Der Nebel, der über-----liegt : der に始まる文は定動詞後置なので Der Nebel を先行詞とする関係文とわかる、「～の上に掛かっている霧は」/so dicht wie 同等比較の表現「同じくらい濃い」。ただし直前に置かれた nicht ganz は部分否定「まったく～というわけではない」/wie jener, der----sich lagert: jener (Nebel) を先行詞とする関係文、「～の上に横たわっているあの霧」/kenntlicher vielleicht als für diesen ist: この文の主語は次にくる dass 文章。「～ことはよりはっきりしているかもしれない」/von mehr als einem : 直訳すれば「一人以上の人間によって」、von は「:つまり」の後に来る複数 3 格の Männern までかかる。/die-----zustrebten は Männern を先行詞とする関係文。die は複数 1 格の関係代名詞。「---同じ目標 (Ziele) へ向かった男達」。/続く die Bilder----- camera obscura, festzuhalten は Ziele の内容を説明する zu 不定詞句の付加語的用法。「カメラ・オブスクーラの中の像を固定するという目標」だが、die Bilder を後続する関係文 die ---- bekannt waren がさらに規定している。つまり zu 不定詞句のなかに関係文が入り込んでいる構造。Ziele < das Ziel には (現在ではあまり使われない) 単数 3 格語尾がついている。

順送り訳

霧、それは写真術の始まりの上にかかっているが、あれ(霧)ほど濃いわけではない、それは印刷術の発端の上に居座っている(霧だ)。だからこれにとってよりもひよっとすると見分けやすいのは、この発明のための刻限がやってきていて、それが複数の人間に感じ取られていたことだ。つまり男たちによって、その彼らは互いに無関係に同じ目標に向かっていたのだ、すなわちカメラ・オブスクーラの中の像を、それらは遅くともレオナルド以来既知の事柄だったが、固定するという目標である。

評釈

「順送り訳」の試みは冒頭の 1 行目から頓挫してしまいそうである。それが分かるのが最初の網掛け部分。最初に Der Nebel と置き、その直後から関係文が始まる。文全体としては比較級を用いて「霧」の濃さを比較する仕組みなのだが、比較の対象は jener であり、これに関係文が続く。比較されるふたつの「霧」は、どちらも 10 語で構成されている。つまり述部 ist nicht ganz so dicht wie (...は～ほど濃いというわけではない) の前後に同じ語数の < 名詞 (相当語) + 関係文 > が置かれるという、いかなれば線対照が作りだされる美文構造となっている。このエッセイでは、読者は聞いて理解するのではなく、目で愉しむべき文体に向き合うことになる。以下文体に関する評釈は、本文中の網掛けおよび文法注釈を参照されたい。その他読者が念頭に置くべき、テキスト外部の情報は罫線で囲った別枠で示してある。写真はほぼ「文学世界」掲載時の位置に収めた。

Als das nach ungefähr fünfjährigen Bemühungen Niépce und Daguerre zu gleicher Zeit geglückt war, griff der Staat, begünstigt durch patentrechtliche Schwierigkeiten, auf die die Erfinder stießen, die Sache

auf und machte sie unter deren Schadloshaltung zu einer öffentlichen.

語彙

die Bemühung(en) < bemühen の動作名詞で「努力、苦勞」/ glücken sein とともに完了形を作り「(3格に)うまくいく」/ begünstigen 「～を促進する、引き立てる」/ patentrechtlich < das Patentrecht 「特許権、特許法」から作った形容詞・副詞 / aufgreifen 「拾い上げる、取り上げる」/ die Schadloshaltung 「補償、損害補償、埋め合わせをすること」< schadlos halten 「埋め合わせをする、損害のない状態にする」の動作名詞

人名・用語解説

Niépce: ジョセフ・ニセフォール・ニエプス(1765-1833)、1826年 カメラ・オブスクーラの像を固定することに成功。現存する最古の写真「研究室からの眺め」を生み出した研究者。/ Daguerre: ルイ・ジャック・マンデ・ダゲール(1787-1851)。ニエプスとは別の方法でカメラ・オブスクーラの像を固定することに成功。共同研究の契約をしていたニエプスが他界したのち、ニエプスの息子と再契約し、自分の発明を「ダゲレオタイプ」と命名した。

文法注釈

Als das-----geglückt war, 副文を導く接続詞 als は過去の1回限りの出来事を表す「～した時に」。wenn を用いると「～する度に」。写真を発明した Niépce und Daguerre は 3 格として使われている。/ griff der Staat----die Sache auf, als に始まった副文が前置されたため、der Staat を主語、die Sache を目的語とする主文が定動詞 griff から始められた。定動詞第 2 位の原則に注意。/ begünstigt durch patentrechtliche Schwierigkeiten, : 過去分詞 begünstigt に始まる分詞構文。それに複数無冠詞の名詞 Schwierigkeiten を先行詞とする関係文 auf die die Erfinder stießen が続いている。現在分詞(動詞の語幹+end)にせよ、過去分詞を用いるにせよ、分詞構文の意味上の主語はほとんどの場合、主文の主語と一致する。「発明者たちが突き当たっていた特許法上の諸問題に促された」のは der Staat 「国家」。/ und machte sie unter deren Schadloshaltung zu einer öffentlichen(Sache が略されている): 前置詞句 unter deren Schadloshaltung の deren は複数名詞 die Erfinder を受ける指示代名詞。unter は「～のもとで」と条件や状況を示す。unter der Bedingung, dass-----「という条件のもとで」などの場合は 3 格名詞とともに用いる。

順送り訳

それがおよそ 5 年の苦勞の後の同じ時期にニエプスとダゲールに成功した時、国家が、特許法上の困難に促されて、これに発明者たちは突き当たっていたのだが、この案件をとりあげ補償金を支払ったうえで、それを公共のものとしたのだった



Der Photograph Karl Dauthede, der Vater des Dichters, und seine Braut (Selbstbildnis 1857):

写真家カール・ダウテンダイ、作家の父、彼の花嫁(自らの写真館にて撮影、1857年)

Damit waren die Bedingungen einer fortdauernd beschleunigten Entwicklung gegeben, die für lange Zeit jeden Rückblick ausschloß. So kommt es, daß die historischen oder, wenn man will, philosophischen Fragen, die Aufstieg und Verfall der Photographie nahelegen, jahrzehntelang unbeachtet geblieben sind. Und wenn sie heute beginnen, ins Bewußtsein zu treten, so hat das einen genauen Grund.

語彙

fortdauernd < fort dauern 「持続する」の現在分詞 / beschleunigten < beschleunigen 「～を加速する、～の速度を早める」の過去分詞 beschleunigt を形容詞として用いているため、語尾 en がつけられた / der Rückblick 「回顧、過去を顧みること」 < rück- 前綴り「もとへ戻って」と der Blick 「視線」の合成語 / der Aufstieg 「登ること、興隆」 < aufsteigen 「登る、興隆する」 / der Verfall 「荒廃、衰退」 < verfallen 「荒廃する、衰退する」 / nahelegen 「疑念を向ける・喚起する」 jahrzehntelang 「数十年にわたる」 < das Jahrzehnt -e 「10年」 / unbeachtet 「注目されない」 < beachten 「注意を払う、考慮する」の過去分詞 beachtet に否定の接頭辞 un をつけたもの / das Bewußtsein 「意識」 < bewußt 「意識した、自覚した」 現代正書法では das Bewusstsein

文法注釈

die -----ausschloß(現代正書法では ausschloss < ausschließen 「締め出す、不可能にする」): Entwicklung

を先行詞とした関係文。関係文の動詞が ausschloß であるため、先行詞は Bedingungen とはならない。／So kommt es: es は形式主語で、意味上の主語は daß(現代正書法では dass)以下の副文章。「それゆえ～ということになった」daß die historischen oder, ---, philosophischen Fragen, --- jahrzehntelang unbeachtet geblieben sind.が骨格。破線の部分に wenn man will 「言うなれば」および die ----- nahelegen: Fragen(die Frage の複数形)を先行詞とする関係文が入り込んでいる。／Aufstieg und Verfall: 二つの概念(「興隆」と「衰退」)を別々のものと考えずひとまとまりの概念とする、いわゆる二語一語の表現で、冠詞はつけない。Leben und Tod「生死」< das Leben と der Tod、Himmel und Erde「天地」< der Himmel と die Erde など。／Und wenn + 接続法第 2 式あるいは直説法で、「～であっても」という認容を表現する

順送り訳

これでもって持続的に加速される発展の条件が与えられたが、それ(発展)が長い間すべての回顧を排除していた。それゆえこうということになった、すなわち歴史的な、言うなれば哲学的な問いが、それは写真の勃興と衰退に疑念をむけるものだが、数十年間注目されずにきてしまったということである。たとえ今になってそれらが意識に上り始めたにしても、それにははっきりした理由がある。

Die jüngste Literatur schließt an den auffallenden Tatbestand an, daß die Blüte der Photographie — die Wirksamkeit der Hill und Cameron, der Hugo und Nadar — in ihr erstes Jahrzehnt fällt. Das ist nun aber das Jahrzehnt, welches ihrer Industrialisierung vorausging. Nicht als ob nicht bereits in dieser Frühzeit Marktschreier und Scharlatane der neuen Technik aus Erwerbsgründen sich bemächtigt hätten; sie taten das sogar massenweise.

語彙

an 4 格 anschließen 「～に接続する、ぴったり合う」／der Tatbestand 「事情、事態」／die Blüte 「(果樹などの)花、(転じて、文化などの)精華」 die Wirksamkeit 「有効性、効力の生じた状態」< wirksam 「役に立つ、効力の生じた」／fallen 基本は「落ちる」の意味だが、in 4 格と結んで、「～に属する」／die Industrialisierung 「産業化」< industrialisieren 「～を産業化する」/vorausging < vorausgehen 「～(3 格)に先立つ、先行する」の過去形／der Marktschreier 「大声で客を呼ぶ人、露天商」< der Markt 市場 + der Schreier 叫ぶ人(schreien 叫ぶ)／der Scharlatan 「山師、いかさま師」／Erwerbsgründen < Erwerbs- 生業の、生計の + der Grund 理由／sich bemächtigen ～を我がものとする／massenweise 「大群をなして」< die Masse 「大群、多数」+ 接尾辞 -weise(名詞や形容詞につけて副詞をつくる後ろ綴りで ausnahmsweise 「例外的に」 normalerweise 「普通なら」など)

人名・用語解説

Hill und Cameron, Hugo und Nadar: 英国人デイヴィット・オクタヴィアス・ヒル(David Octavius Hill 1802-1870)、人生の大半を英国の植民地セイロン(現スリランカ)で過ごしたジュリア・マーガレット・キ

ヤマロン(Julia Margaret Cameron 1815-1879)、フランスのユーゴー(Charles Hugo 1826-71)およびナダールことガスパール・フェリックス・トゥールナション(Gaspar Felix Tournachon 1820-1910)。ベンヤミンはこの4人を初期の写真術に関わったとして名をあげているが、シャルル・ユーゴーは文豪ヴィクトル・ユーゴーの息子、ジャーナリスト兼写真家であり父親の写真を撮っている。またヤマロンが写真を撮ったのは、イギリスに帰国していた10年間(1865-75)に限られており、ベンヤミンの言う写真術最初期の10年間とは言い難い。

文法注釈

Tatbestand「事態」の内容を dass 以下の副文章が説明している。「～という事態」/welches は直前の das Jahrzehnt を受ける関係代名詞。関係文では動詞の定形は文末に置かれ、かつ分離動詞の前綴りは分離しないため ging---voraus とはならず vorausging。/aus Erwerbsgründen:aus は3格支配の前置詞、複数3格の語尾-n が付いているが、名詞 Erwerbsgrund が複数無冠詞になっていることに注意。あえて訳せば「いろいろな生業上の理由から」/nicht als ob:「だからと言って・・・ではない」という定形表現で接続法第二式過去(bedmächtigt hätten)とともに副文を作っている。文頭の Nicht はセミコロン(;)ののちに続く sogar「それどころか～さえした」と呼応する。

順送り訳

最新の文献は人目を惹く事態に符合している、つまり写真術の精華は—ヒルとヤマロン、ユーゴーとナダールの仕事—その最初の10年間のものだという事態に。だがそれはあの10年間であり、これは写真術の産業化に先立つ期間だ。だからと言って露天商や山師たちがいろいろと生業を理由にして、この

新しい技術を身に着けなかったわけではなく、それどころか彼らは群れをなして身に着けたのだ。



Fischweib, David (Octavius Hill)

魚売りの女、デイヴィット(オクタヴィアス・ヒル)撮影

Aber das stand den Künstlern des Jahrmarkts, auf dem die Photographie ja bis heute heimisch gewesen ist, näher als der Industrie. Die eroberte sich das Feld erst mit der Visitenkarte-Aufnahme, deren erster Hersteller bezeichnenderweise zum Millionär wurde. Es wäre nicht zu verwundern, wenn die photographischen Praktiken, die heut zum erstenmal den Blick auf jene vorindustrielle Blütezeit zurücklenken, in unterirdischem Zusammenhang mit der Erschütterung der kapitalistischen Industrie stünden.

語彙

des Jahrmarkts < der Jahrmarkt 「市^{いち}が立つときの縁日」の 2 格形 / heimisch 「慣れ親しんだ、馴染んだ」 / erobern 「征服する、～を自分のものとする」 / Visitenkarte 「名刺」 < die Visite 「訪問」 + die Karte 「カード」 / bezeichnenderweise 「特徴的なことだが、いかにもそれらしいことだが」 < 動詞 bezeichnen 「表示する、特徴を述べる」の現在分詞形 = 形容詞 bezeichnend に接尾辞 -weise がついたもの / der Millionär 「百万長者、大金持ち」 / werden だけでも 「～になる」の意味だが、zu プラス 3 格名詞で 3 格名詞への変化を示す / verwundern 「不思議がらせる」 / die Praktik 複数形が Praktiken 「策略、手練手管」、「実習、演習」の意味の das Praktikum の複数形は Praktika / vorindustriell 「産業化以前の」 < 前綴り vor 「…前」 + industriell < die Industrie 「工業、産業」 / zurücklenken 「～を元の場所に戻す、過去に向けさせる」 / unterirdisch < irdisch 「この世の、地上の」に 「下、地下」を意味する前綴り unter がついた / die Erschütterung < erschüttern 「～を揺り動かす」の動作名詞

文法注釈

文頭 Aber に続く das が主語で stand 3 格 näher als 3 格という構造が基本 (näher は nah の比較級で den Künstlern が der Industrie と比較されている)、そこに des Jahrmarkts を先行詞とする関係文 auf dem die Photographie ja bis heute heimisch gewesen ist が割り込んでいる。先行詞が Jahrmarkt < der Markt なので前置詞は公的な場所に使われる auf が使われている。 / Die eroberte sich das Feld..... の Die は直前の der Industrie を受ける指示代名詞。 / コンマの後の deren は女性名詞 Visitenkarte-Aufnahme を先行詞とする関係代名詞 (2 格) / Es wäre nicht zu verwundern、接続法第二式 (wäre) が使われているが、動詞 sein プラス zu 不定詞による表現は、受動可能 「～されうる」か受動義務 「～されねばならない」の意味となる。 / wenn 文章の主語は die photographischen Praktiken、動詞は副文ゆえ文末の stünden (stehen の接続法第二式現在)。そのなかに die photographischen Praktiken を先行詞とする関係文 die-----zurücklenken (直説法現在) が挿入されている。接続法 stünden はありもしない非現実を示すのではなく、表現を和らげる用法。 / Erschütterung der kapitalistischen Industrie、動名詞プラス 2 格名詞の形、erschüttern は他動詞なのでこの 2 格は動詞の目的語と考えるのが妥当。

順送り訳

しかしそれは市^{いち}が立つときの大道芸人に似つかわしいもので、そこは写真が今日にいたるまでもなじみぶかいもので、産業よりも似つかわしかった。それは名刺版写真によってようやく市場を征服したのだ

が、その最初の製作者は当然ながら百万長者となった。それは不思議なことでもないだろう、もし写真家の手練手管が、それが今日始めて視線を産業化以前の最盛期にひきもどしてくれるのだが、資本主義の産業を揺り動かすことと地下で関連しているかもしれないのなら。

Darum jedoch ist es um nichts leichter, den Reiz der Bilder, die in den schönen jüngst erschienenen Publikationen alter Photographien vorliegen, für wirkliche Einsichten in deren Wesen nutzbar zu machen.

語彙

um nichts「まったく～ない」／der Reiz「魅力」／jüngst「最近、近頃」／erschiedenen＜動詞 erscheinen「出現する、出版される」の過去分詞形 erschienenを形容詞として使ったために、さらに語尾 -enがついている／die Publikation「出版物」／vorliegen「ある、存在する」／die Einsicht「理解、洞察」＜einsehen「理解する、見分ける」／nutzbar「役に立つ」

文法注釈

es は形式主語、本主語は den Reizfür.... nutzbar zu machen「～の魅力を...のために役立てること」という zu 不定句だが、その間に複数 2 格の Bilder を先行詞とする関係文 die in den schönen jüngst erschienenen Publikationen alter Photographien vorliegen が挿入されている。erschiedenen の不定形 erscheinen は自動詞。自動詞の過去分詞はその動作が完了し、そこから生じた結果を示す。「～した、してしまった」難しく言えば「能動完了」である。他方、他動詞の過去分詞は「受動完了」で「～された、されてしまった」という意味になる。／wirkliche Einsichten in deren Wesen nutzbar zu machen. deren は Bilder を受けた複数 2 格の指示代名詞だが、続く Wesen とともに 4 格名詞句を形成し、in プラス 4 格なので動作の方向、Einsicht が向かう方向を示している。

順送り訳

だがそれだからといって、それがより簡単になったわけではまったくない、写真の魅力を、それらは最近出版された古い写真の刊行物の中にあるのだが、その本質を実際に色々理解するために、役に立つようにすることが。

Überaus rudimentär sind die Versuche, der Sache theoretisch Herr zu werden. Und so viele Debatten im vorigen Jahrhundert über sie geführt wurden, im Grunde haben sie sich nicht von dem skurrilen Schema freigemacht, mit dem ein chauvinistisches Blättchen, der »Leipziger Anzeiger«, glaubte, beizeiten der französischen Teufelskunst entgegentreten zu müssen.

語彙

überaus「きわめて、おおいに」／rudimentär「退化した、僅かな」／2 格名詞＋Herr werden「～を支配、コントロールする」／Debatten＜die Debatte「討議、議論」／vorig「以前の、すぐ前の」／im

Grunde「根本において、結局のところ」/skurril「滑稽な、奇妙な」/freigemacht< sich von 3 格 frei machen「3 格から自由になる、解放される」/chauvinistisch< der Chauvinismus「偏狭な愛国主義、国粋主義」の形容詞形/beizeiten「時をたがえず、時機をのがすことなく」/die Teufelskunst< der Teufel「悪魔」と die Kunst「技術、芸術」との合成語/entgegentreten「3 格に立ち向かう、対抗する」

文法注釈

Und so viele Debatten im vorigen Jahrhundert über sie geführt wurden 定動詞 wurden が文末に来ていることに注意。つまりこの文は従属節＝副文であり、コンマに続く im Grunde haben sie sich nicht von dem skurrilen Schema freigemacht 以下が主文ということになる。となると Und so viele 以下の副文は、so プラス 形容詞(副詞)によって導かれる一種の認容文。「たとえ～であっても」となる。現代では soviel と一語で。/女性名詞 Teufelskunst は男性名詞 der Teufel と女性名詞 die Kunst との合成語だが、合成語の場合、最後の名詞の性が、合成語全体の性となる。しかしアクセントは最初の語にある。/mit dem ein chauvinistisches Blättchen, der »Leipziger Anzeiger«, glaubte, beizeiten der französischen Teufelskunst entgegentreten zu müssen は dem skurrilen Schema< das Schema を先行詞とする関係文で、定動詞は glaubte で続く zu 不定詞句を目的語とする。der »Leipziger Anzeiger« は関係文の主語 ein chauvinistisches Blättchen の言い換え、同格。

順送り訳

事柄を理論で制御する試みはまったく退化している。たとえ前世紀にどれほど多くの議論が行われたにしても、結局のところそれらは例の滑稽な図式から自由になることはなかった、その図式でもって国粋的な小新聞、ライブツィヒ新報は信じていた、時機を逃さずフランス式の悪魔の技術に立ち向かわなければならないと。

»Flüchtige Spiegelbilder festhalten zu wollen, heißt es da, dies ist nicht bloß ein Ding der Unmöglichkeit, wie es sich nach gründlicher deutscher Untersuchung herausgestellt hat, sondern schon der Wunsch, dies zu wollen, ist eine Gotteslästerung. Der Mensch ist nach dem Ebenbilde Gottes geschaffen und Gottes Bild kann durch keine menschliche Maschine festgehalten werden. Höchstens der göttliche Künstler darf, begeistert von himmlischer Eingebung, es wagen, die gottmenschlichen Züge, im Augenblick höchster Weihe, auf den höheren Befehl seines Genius, ohne jede Maschinenhilfe wiederzugeben.«

語彙

flüchtig「表面的な、一時的な」/Spiegelbilder< das Spiegelbild「映像、鏡像」の複数形< der Spiegel「鏡」+ das Bild「像、イメージ」/festhalten「～を記録しておく」/herausgestellt< herausstellen「～をはっきり示す」/die Gotteslästerung<(der) Gott「神」+ die Lästerung「冒瀆」

<lästern「～を冒瀆する」/Ebenbilde<das Ebenbild「似姿」に(現代ドイツ語ではほぼ消滅した)男性・中性名詞単数 3 格の語尾 e がついている/geschaffen<不規則動詞 schaffen「創造する」の過去分詞。geschafft なら「やり遂げる」という意味の規則動詞/die Eingebung「靈感、思いつき」<eingeben 3 格+4 格「…に～を吹き込む」/gottmenschlich「神と人との」/die Weihe「神聖なものとする、荘厳」/der Genius「守護神、守護霊」、wiedergeben「～を再現する」/die Maschienenhilfe「機械の助け」

文法注釈

Flüchtige Spiegelbilder festhalten zu wollen, ist eine Gotteslästerung, dies ist nicht bloß ein Ding der Unmöglichkeit,sondern schon der Wunsch, dies zu wollen,は nicht bloß,sondern schon という「単に～であるばかりか、すでに～なのだ」という表現。この間に wie es sich nach gründlicher deutscher Untersuchung herausgestellt hat という副文が入り込んでいる。これは ein Ding を先行詞とし、前文の一部を代名詞 es で受ける一種の関係文。/dies は指示代名詞 dieser の中性名詞形 dieses の語尾 es がない形で、1 格・4 格で使われる。ここでは wollen の目的語つまり 4 格。/begeistert von himmlischer Eingebung の begeistert は形容詞になっていると考えることもできるが、やはり他動詞 begeistern「～を靈感で満たす」の過去分詞による分詞構文と見たほうがよい。満たされるのは主文の主語 der göttliche Künstler。Höchstens 以下の文章の構造は主語 der göttliche Künstler+助動詞 darf+本動詞 wagen+形式目的語 es, 本来の目的語が die gottmenschlichen Züge----wiederzugeben という不定詞句。ohne---zu...「～することなく」とは読まないことが肝要。そう読んでしまうと im Augenblick höchster Weihe, auf den höheren Befehl seines Genius,「至高の瞬間に、自らの守護霊の一段と高い命令に応じて」という副詞句の落ち着きどころがなくなってしまう。ohne jede Maschienenhilfe はこれらと並ぶ「機械の助けなどまったくなしに」という副詞句。

順送り訳

その場限りの鏡像を固定しようとするとはこういうことだ。これは単に不可能なことというだけではなく、それは根本的なドイツの研究によってはっきり示されているのだが、そればかりかこうしたことを望むという願いは神への冒瀆でもある。人間は神の似姿となるよう創造され、神の像はいかなる人間の機械でも固定されることはできない。せいぜい神的な芸術家が、天の靈感に満たされて、それを企てるのが許される。神と人とが産み出す表情を、最高に荘厳な瞬間に、自分の守護霊のより高い命令によって、機械の助けなどまったくなしに、再現することを。

この新聞社説はいかにも「国粹主義、排外主義」的、「頑迷固陋」といった感じがするが、そもそも「Leipziger Anzeiger」なる新聞は実在しない。ドイツ人写真術師としては最初期の人物のひとりといえるカール・ダウテンダイは、ロシア帝国のサンクト・ペテルブルクでダゲレオタイプによる写真館を経営し、その後ドイツに妻を伴って帰国する。この写真術師の息子が、長じて作家マクス・ダウテンダイとして活躍することになる。が、この息子は父親の伝記を書いた際に、写真術に関する社説を贋

造し新聞「Leipziger Anzeiger」からの書き抜きだとして伝記に紛れ込ませている。ベンヤミンは知ってか知らずか、架空の論説を自分のエッセイで「引用」していることになる。

Hier tritt mit dem Schwergewicht seiner Plumpeheit der Banausenbegriff von der »Kunst« auf, dem jede technische Erwägung fremd ist und welcher mit dem provozierenden Erscheinen der neuen Technik sein Ende gekommen fühlt.

語彙

das Schwergewicht 「重点、主眼」<schwer + das Gewicht/die Plumpeheit 「ぶざまさ、無趣味」< plum 「不格好な、ぶざまな」/der Banausenbegriff 「俗物の考え」<der Banause, -n-n(男性弱変化名詞)「俗物」+der Begriff 「考え、概念」/die Erwägung 「考慮、検討」<他動詞 erwägen「～を考える、検討する」/provozierend<provozieren 「～を挑発する」の現在分詞/Erscheinen は動詞 erscheinen 「現れる、出現する」の語頭の e を大文字にし中性名詞化したもの「現れ、出現」

文法注釈

Hier tritt mit dem Schwergewicht seiner Plumpeheit der Banausenbegriff von der »Kunst« auf という分離動詞 auftreten 「登場する」を使った主文に、der Banausenbegriff (1 格＝主語)を先行詞とし 3 格関係代名詞 dem、さらに 1 格関係代名詞 welcher とふたつの関係文が続いている。welcher---- ein Ende gekommen fühlt 定動詞は文末の fühlt、ein Endeはその目的語。gekommen のほうは自動詞の過去分詞ゆえ<完了と同時にその事態の継続を示す>「やって来た、やって来てしまった」。やって来たのは sein Ende で welcher 以下の関係文中では目的語だが、分詞 gekommen の意味上の<主語>となっている。

順送り訳

ここに没趣味を強調しながら登場するのは「芸術」に関する俗物の考えなのだが、その考えには技術について斟酌することは無縁であり、その考えは新技術の挑発的な出現によって自分の終りがやってきたのを感じてしまうのだ。

Demungeachtet ist es dieser fetischistische, von Grund auf antitechnische Begriff von Kunst, mit dem die Theoretiker der Photographie fast hundert Jahre lang die Auseinandersetzung suchten, natürlich ohne zum geringsten Ergebnis zu kommen. Denn sie unternahmen nichts anderes, als den Photographen vor eben jenem Richterstuhl zu beglaubigen, den er umwarf.

語彙

demungeachtet 「それにもかかわらず」(demunerachtet, dessenungeachtet と同じ副詞)/fetischistisch 「呪物(物神)崇拝の」<der Fetisch 「呪物、物神」/von Grund auf 「まったく、根本的に」/der

Theoretiker「理論家、空論家」/ die Auseinandersetzung「討論、対決」< sich mit 3 格 auseinandersetzen「取り組む、議論を戦わす」/ suchen「～を試みる」/ beglaubigen「～を(公的に)証明する～を本物と立証する」/ umwarf<umwerfen「～をひっくり返す、投げ倒す」の過去

文法注釈

Demungeachtet から suchten までは、es を主語としそれに関係文が繋がる強調構文。Es war Kolombus, der Amerika entdeckte.「アメリカを発見したのはコロンブスだ」などの形式。この芸術に関する考えこそ写真の理論家たちが対決しようとしてきたものだった、という関連。ohne-...-zu 不定詞はこの場合「～なしに」という意味よりも、…だったが「～することがなかった」と結果を示す表現。nichts anderes, als「～以外は何もない」、den er umwarf は jenem Richterstuhl を先行詞とする関係文。er はその前の Photographen<der Photograph --en, -en(男性弱変化名詞)を受ける人称代名詞。

順送り訳

それにもかかわらずこの呪物崇拜的な、根本からして反機械技術的な、**芸術に関する考えこそが、写真術の理論家たちがほぼ 100 年にわたって対決を試みてきたものだ、むしろ最低限の成果に達することもなかった。**というのも彼らが企てたのは、まさに写真術師をあのか裁判官席の前で本物だと立証することだったが、その椅子を彼(写真術師)はひっくり返していたのだ。

Da weht eine ganz andere Luft aus dem Exposé, mit dem der Physiker Arago als Fürsprecher der Daguerreschen Erfindung am 3. Juli 1839 vor die Kammer der Deputierten trat. Es ist das Schöne an dieser Rede, wie sie an allen Seiten menschlicher Tätigkeit den Anschluß findet. Das Panorama, das sie entwirft, ist groß genug, um die zweifelhafte Beglaubigung der Photographie vor der Malerei, die auch in ihm nicht fehlt, belanglos erscheinen, vielmehr die Ahnung von der wirklichen Tragweite der Erfindung sich entfalten zu lassen.

語彙

wehen「風が吹く」/ das Exposé「建白書、報告書」/ der Fürsprecher「代弁者」/ Daguerresch<人名 Daguerre の形容詞形「ダゲールの」(現代正書法では“daguerresch と小文字で始める) / die Kammer「議院、国会」/ Deputierten < der/die Deputierte (フランスの)代議員 (die Deputiertenkammer で「フランス下院」) / das Panorama「パノラマ、眺望」/ entwirft<entwerfen「スケッチする、輪郭を描く」/ zweifelhaft「疑わしい」<der Zweifel「疑念」, an 3 格 zweifeln「3 格を疑う」/ die Beglaubigung「証明、認証」< beglaubigen「～を証明、保証する」/ belanglos「重要でない、些細な」<der Belang「重要性」+...los「～がない」/ die Tragweite「射程距離、意義」/ entfalten「～を広げる、伸ばす」

人名・用語解説

Arago: フランソワ・アラゴー(Francois Jean Dominique Arago 1786-1853)はフランスの物理学者にして政治家。

文法注釈

aus dem Exposé, mit dem der Physiker Arago als Fürsprecher der Daguerreschen Erfindung am 3. Juli 1839 vor die Kammer der Deputierten trat. Exposéを先行詞とする関係文だが、アラゴーが「それを携えて」下院議員たちのまえに立ったのだから、前置詞 mit 付きの関係文となった。wie sie an allen Seiten menschlicher Tätigkeit den Anschluß findet.の最初にある接続詞 wie は、主文 Es ist das Schöne an dieser Rede 中の名詞を受けた代名詞 sie とともに一種の関係文を作っている。先行詞は女性名詞の Rede。二つ目の文の骨組みは、Das Panorama, das 関係文, ist groß genug, um die--- Beglaubigung, die 関係文, belanglos erscheinen (zu lassen), vielmehr ----- sich entfalten zu lassen. 「パノラマは4格を~させるためには十分壮大だ」あるいは「パノラマは十分壮大なので、4格を~させることができる」。

順送り訳

そこへまったく別の風が建白書から吹いてくる、それをもって物理学者アラゴーはダゲールの発明の代弁者として、1839年7月3日、フランス下院議会へと赴いたのだった。この演説の美点とは、それが人間の活動のすべての側面に結びついていることだった。展望は、その輪郭を演説が描いているのだが、十分大きく、絵画からすると疑わしい写真の保証を、それは建白書にもないわけではないが、些末なことと思わせる、むしろこの発明の実際の射程に関する予感を大きくさせるものだった。



Der Philosoph Schelling (um 1850)
哲学者シェリング(1850年頃)

»Wenn Erfinder eines neuen Instrumentes«, sagt Arago, »dieses zur Beobachtung der Natur anwenden, so ist das, was sie davon gehofft haben, immer eine Kleinigkeit im Vergleich zu der Reihe nachfolgender Entdeckungen, wovon das Instrument der Ursprung war.« In großem Bogen umspannt diese Rede das Gebiet der neuen Technik von der Astrophysik bis zur Philologie: neben dem Ausblick auf die Sternphotographie steht die Idee, ein Corpus der ägyptischen Hieroglyphen aufzunehmen.

語彙

der Erfinder「考案者、発明者」<erfinden／die Beobachtung「観察」<beobachten／immer 比較級や比較を表現する語句とともに「ますます」／im Vergleich zu (mit)3 格「～と比べて」／nachfolgend<nachfolgen「3 格に続く、従う」／die Entdeckung「発見」<entdecken／der Ursprung「起源、出所」／der Bogen「弧」in großem Bogenで「大きく弧を描いて・湾曲して」／umspannen（非分離動詞）「包含する」<分離動詞の umspannen は「張り替える、付け替える」／die Astrophysik「天体物理学」／die Philologie「文献学、文学語学研究」／der Ausblick「展望」／der Corpus「集成、コーパス」／ägyptisch<Ägypten「エジプト」の形容詞形／Hieroglyphen<die Hieroglyphe「象形文字」

文法注釈

das, was sie davon gehofft haben, was 以下は不定関係代名詞節で、指示代名詞 das と呼応している。／Entdeckungen, wovon das Instrument der Ursprung war.wovon は Entdeckungen を受ける関係代名詞と von が融合したもの。／neben dem Ausblick auf die Sternphotographie steht die Idee, ein Corpus der ägyptischen Hieroglyphen aufzunehmen. neben dem Ausblick auf die Sternphotographie 6 語からなる副詞成分で一つの文肢となるため、定動詞 2 位の原則からその次に来る die Idee が主語。つづく zu 不定詞句はこの die Idee「理念、アイデア」のような抽象語の内容を、具体的に説明する付加語的用法となっている。

順送り訳

「新しい器具の発明者たちが」とアラゴーは言う、「これを自然の観察に利用していくなら、彼らが期待していたものなどは、一連の後に続く諸発見と比べると、その起源がこの器具であるような（諸発見）だが、ますます小さなものとなる」。この演説は天体物理学から文献学までの新技術の領土を大きな弧を描くように包みこんでいる、つまり天文写真への展望とならんで、エジプトのヒエログリフ資料の撮影というアイデアがあるのだ。

原注

I Theodor Bossert / Heinrich Guttman, Photographie. 1840—70. Ein Bildbuch nach 200 Originalen, Frankfurt a. M.1930. テオドール・ボッセアト／ハインリヒ・グットマン著「写真、1840-70 まで 原版

200 葉による写真集」フランクフルト 1930 年— Heinrich Schwarz, David Octavius Hill. Der Meister der Photographie, 80 Bildtafeln, Leipzig 1931. ハイน์リヒ・シュヴァルツ著「写真の巨匠、デイヴィット・オクタヴィアス・ヒル 図版 80 葉」ライプツィヒ 1931 年

Daguerres Lichtbilder waren jodierte und in der camera obscura belichtete Silberplatten, die hin- und hergewendet sein wollten, bis man in richtiger Beleuchtung ein zartgraues Bild darauf erkennen konnte. Sie waren unica; im Durchschnitt bezahlte man im Jahre 1839 für eine Platte 25 Goldfrank. Nicht selten wurden sie wie Schmuck in Etuis verwahrt. In der Hand mancher Maler aber verwandelten sie sich in technische Hilfsmittel.

語彙

jodierte < jodieren 「ヨード加工する」/ belichtet < belichten 「光にさらす、感光させる」/ Silberplatten < das Silber 「銀」+ die Platte 「板、プレート」/ hin-und her 「あちこち、行ったり来たり」/ wenden 「～をある方向に向ける」/ die Beleuchtung 「照明」< beleuchten 「4 格に光をあてる」/ zartgrau < zart 「もろい、仄かな」+ grau 「グレーの」/ unica 「ただ一つのもの、一点もの」(ラテン語) / der Goldfrank 「金フラン」(1865 年成立のフランス、ベルギー、スイス、イタリアなどによるラテン貨幣同盟が発行、流通させた金フラン貨) / Etuis < das Etui 「(平たい) 容器、ケース」/ verwahrt < verwahren 「～を保管する」/ in 4 格 sich verwandeln 「～に姿を変える」/ Hilfsmittel (複数形) < die Hilfe 「手助け、支援」+ das Mittel 「手だて、方法」

文法注釈

jodiert も belichtet も過去分詞を形容詞として用いたもので、共に Silberplatten を修飾し、これを先行詞とした関係文が続き、さらに「あちこちと向きを替える」動作がどこまで続くのかを、bis に導かれる従属節 bis----konnte が説明している。/ In der Hand mancher Maler は「幾多の画家たちの手において」=「幾多の画家たちが手に持つ」と=「幾多の画家たちが手にするようになると」と条件を示す。/ in technische Hilfsmittel は in + 4 格なので「方向」、主語(sie= Daguerres Lichtbilder)が sich verwandeln する「方向」を示している。

順送り訳

ダゲールの写真はヨード加工されたものでカメラ・オブスクーラの中で感光させた銀板だった、それらは色々と向きを変えられる必要があった、人がうまく光を当てるとその上に仄かな灰色の像を認めることができるまでは。それらは一点ものだった、だから平均して 1839 年では一枚の種板につき 25 金フランを支払っていた。それらは装飾品と同じに箱に入れて保管されることは稀ではなかった。少なからぬ画家たちの手にわたるようになると、それらは技術的な補助手段に変化してしまった。

Wie siebzig Jahre später Utrillo seine faszinierenden Ansichten von den Häusern der Bannmeile von Paris nicht nach der Natur, sondern nach Ansichtskarten verfertigte, so legte der geschätzte englische Porträtmaler David Octavius Hill seinem Fresko der ersten Generalsynode der schottischen Kirche im Jahre 1843 eine große Reihe von Porträtaufnahmen zugrunde. Diese Aufnahmen aber machte er selbst. Und sie, anspruchslose, zum internen Gebrauch bestimmte Behelfe, sind es, die seinem Namen die historische Stelle geben, während er als Maler verschollen ist.

語彙

faszinierend<faszinieren「～を魅了する」/ Ansichten<die Ansicht「見方、光景、風景画」/ die Bannmeile「(都市権などの及ぶ)区域・街区」/ Ansichtskarten「絵葉書」<die Ansicht「風景」+ die Karte「葉書」/ verfertigte<verfertigen「製作する」/ zugrunde legen ～を基礎とする/ geschätzt<schätzen「～を評価する、高く評価する」/ das (die) Fresko「フレスコ画」/ die Generalsynode「全教会総会」/ schottisch「スコットランドの」<der Schotte「スコットランド人」Schottland「スコットランド」/ anspruchlos「控えめな、慎ましい」/ intern「内部の、部内の」/ der Gebrauch「使用、利用」<gebrauchen/ bestimmt<bestimmen「決める、規定する」の過去分詞 (be-は非分離前綴りなので ge がつかない) / der Behelf「間に合わせ、代用品」/ verschollen「消息不明の、とっくに過ぎ去った」

人名・用語解説

Utrillo: モーリス・ユトリロ (Maurice Utrillo, 1883-1955) パリのモンマルトル地区生まれ。アカデミックな美術教育を受けることはなかったが、独学で後期印象派とキュビズムの特徴が一体となった風景画スタイルを確立したといわれる。1910 年前後にユトリロが絵葉書を見ながら制作したことは事実だが、その理由については諸説ある。

文法注釈

wie Siebzig Jahre später-----verfertigte までは長い従属節、コンマの後に so legte-----と主文が始まるが“so”はここから主文が始まるというシグナル / anspruchslose, zum internen Gebrauch bestimmte Behelfe は主語 sie (Aufnahmen)の同格で「控えめな、内々の使用に限定された一時のぎの写真」 / Und sie, anspruchslose, zum internen Gebrauch bestimmte Behelfe, sind es, die seinem Namen die historische Stelle geben この部分の構造は sie sind es, die-----geben であり、関係文による一種の強調構文 / während er als Maler verschollen ist 従属接続詞 während には「～の間(時間的継続の表現)」と「～する一方で(コントラストの表現)」の用法があるが、この場合は後者。

順送り訳

70 年後ユトリロがパリ市街の家々を、写生によらず絵葉書をもとにして、魅力的な風景画にしたように、評価の高い英国の肖像画家デイヴィッド・オクタヴィアス・ヒルは 1843 年スコットランド教会の最

初の全教会総会のフレスコ画のために大量の肖像写真を基礎にした。だがこれらを撮影したのは彼自身なのだ。さらにそれらは、控え目な、内々の利用のための間に合わせだったが、彼の名前に歴史上の位置を与えているものなのだ、画家としての彼の名は忘れられてしまったというのに。

Freilich führen tiefer noch als die Reihen dieser Porträtköpfe in die neue Technik einige Studien ein: namenlose Menschenbilder, nicht Porträts. Solche Köpfe gab es längst auf Gemälden. Blieben sie im Familienbesitz, fragte man hin und wieder noch nach den Dargestellten. Nach zwei, drei Generationen aber ist dies Interesse verstummt: die Bilder, soweit sie dauern, tun es nur als Zeugnis für die Kunst dessen, der sie gemalt hat.

語彙

freilich 「もちろん」(現実度の)判断、「ただし」(留保条件)／Porträtköpfe<Portrait + der Kopf「頭、頭部、頭数」の複数／Gemälden<das Gemälde「絵画、油絵」／hin und wieder「ときおり、ときたま」／den Dargestellten<darstellen の過去分詞の名詞化(複数 3 格形)／verstummen「黙り込む、鳴りやむ」、soweit「～する限りは」(接続詞)

文法注釈

Freilich führen tiefer noch als die Reihen dieser Porträtköpfe in die neue Technik einige Studien ein. 主語は einige Studien<die Studie「研究、習作」、tiefer は比較級なので比較の対象は als で示される。主語と die Reihen dieser Porträtköpfe とが比較されている。einführen は元来が 4 格目的語を伴う他動詞だが自動詞化されている。「(我々を、人々を)新技術へと導く」／auf Gemälden 語尾からわかるように、複数 3 格しかも無冠詞で使われている＝「いろいろな絵」／Blieben sie im Familienbesitz 動詞が文頭に來ているのは接続詞の wenn が省略されているため。=Wenn sie im Familienbesitz blieben と同じ。sie は Porträts、Solche Köpfe を指す。文章の骨組みは die Bildertun es nur als Zeugnis für die Kunst「それらの絵画は技芸の証としての役割を果たすのみ」に条件文 soweit sie dauern とか、指示代名詞とそれを先行詞とする関係代名詞からなる関係文 dessen, der sie gemalt hat.「その絵を描いた人の…」が付け加えられている。

順送り訳

ただこの新技術に目を引き付けるのは、これらの多量の肖像写真の人物よりも何点かの習作のほうなのだ。つまり無名の人間たちの写真のほうであって、肖像写真ではないのだ。絵画にはそうした人間たちはとっくに存在していた。絵画が家族の所有となっているのなら、描かれた人々に関して訊かれることも時にはあった。だが 2, 3 世代の後にはこうした興味は沈黙してしまう。つまり絵というものは、それが存在する限りでは、単に技術に関する証拠でしかなくなる、その絵を描いた人の(技術)。

Bei der Photographie aber begegnet man etwas Neuem und Sonderbarem: in jenem Fischweib aus

New Haven, das mit so lässiger, verführerischer Scham zu Boden blickt, bleibt etwas, was im Zeugnis für die Kunst des Photographen Hill nicht aufgeht, etwas, was nicht zum Schweigen zu bringen ist, ungebärdig nach dem Namen derer verlangend, die da gelebt hat, die auch hier noch wirklich ist und niemals gänzlich in die »Kunst« wird eingehen wollen. »Und ich frage: wie hat dieser haare zier / Und dieses blickes die früheren wesen umzingelt! / Wie dieser mund hier geküßt zu dem die begier / Sinnlos hinan als rauch Ohne flamme sich ringelt!«

語彙

das Fischweib 「魚売りの女」<der Fisch + das Weib 「女性、妻」(現代では weiblich 「女性の」という形容詞形が使われるのみ) / New Haven 「ニュー・ヘイブン、ニュー・ヘブン」(英国および米国の地名) / lässig 「さりげない、無造作な」 / verführerisch 「誘惑的な、心を惑わすような」<verführen 「～を惑わす、誘惑する」 / die Scham 「羞恥、恥じらい」 / zu Boden blicken 「目を伏せる」 / in 3 格 aufgehen 「3 格のなかに(埋没して)消滅する」 / ungebärdig 「不躰な」 / verlangend <nach 3 格 verlangen 「3 格を求める、欲しがる」 / gänzlich 「完全に、まったく」 / in 4 格 eingehen 「～のなかに入る、入り込む、消滅する」

下線部(シュテファン・ゲオルゲの詩)の語彙: haare = Haare <das Haar / zier = die Zier = die Zierde 「飾り、誉」 / blickes = Blickes <der Blick / wesen = das Wesen 「本質、人間」 / umzingeln 「取り囲む」 / mund = der Mund / begier = die Begier = die Begierde 「欲望、欲求」 / sinnlos 「意味のない、思慮のない、無感覚の」 / rauch = der Rauch 「煙」 / flamme = die Flamme 「炎、火」 / sich ringeln 「巻きつく」

文法注釈

etwas, was nicht zum Schweigen zu bringen ist, was 以下は不定関係代名詞 was による関係文「～すること」という意味が基本だが、etwas「何か」を補足している。 / nach dem Namen derer verlangend, die da gelebt hat, die auch hier noch wirklich ist und niemals gänzlich in die »Kunst« wird eingehen wollen. ここでもやはり、指示代名詞 derer(女性 2 格)が関係代名詞 die の先行詞となっている。意味の上から見ると、die に始まる関係文は「過去 gelebt hat」、「現在 noch wirklich ist」さらに「未来 wird eingehen wollen」と三つの時間を示している。写真の女性は「かつて生き、いまなおこの目の前いて、この先も～に入っていこうとはしないだろう」という表現。留意すべきは最後の未来時制の動詞の配列。関係文＝従属節＝定動詞後置(文末)というのが、ドイツ文法の大原則だが、このように動詞が三つあるときは要注意。eingehen wollen wird とはならず、定動詞である wird は後ろから 3 番目に移動する。 / また ungebärdig nach dem Namen derer verlangend は現在分詞を用いた分詞構文なので、verlangend の意味上の主語は、主文の主語 etwas「何か」であることに注意。

順送り訳

写真ではしかし、ひとは何か新しいもの、奇妙なものに出会う。つまりニュー・ヘイブン出身のあの魚

売りの女には、その人はさりげなく誘惑的な恥じらいとともに目を伏せているが、何かが、写真術師ヒルの芸術／技術の証しのうちに消滅しないものが、何かが、沈黙へともたらされえないものが残るのだ、(その何かは)ぶしつけにもその人の名を求めている、その人はそこにかつて生き、今もなおそこにおいて、これからも決して「芸術／技術」のなかに完全には消えていこうとはしないのだ。

下線部(詩)の訳

<そして私は尋ねる、どんなにこの髪とこの眼差しの／美しさが昔の人びとをとりこにしたことか！／欲情がわれにもなく炎のない煙のように纏わりつく／この口がここでどのように接吻をしたのか！>
(富岡近雄訳 『ゲオルゲ全詩集』 郁文堂 1994年)。

ヒルが撮影した写真(ニュー・ヘイブンの)「魚売りの女」(別名「ニュー・ヘイブンの美女」)は、当時の魚売りの女性たちが着た制服のような衣類を身に着け、魚籠のようなものに右手を添えて座っている。この女性は正面を見据えるのではなく、ベンヤミンが記述するようにたしかに目を伏せてはいる。だが問題は、その後引用されるシュテファン・ゲオルゲの詩である。まるでこの無名の、魚売りの女性の<髪と眼差し>、<口>もとの妖艶さを際立たせるような引用である。しかし4つの詩節から構成されるこの詩は、どうもそういう詩ではなさそうなのだ。まず第1詩節では古代ローマの若人の姿、次いで中世の天使像、さらに近世の諸侯の姿が歌われておりどこにも女性の形姿は見当たらない。ベンヤミンが引用するのはこれらに続く最終詩節だが、詩全体との関連から見る限り<髪と眼差し>や<口>もとは、詩のなかの<私>が向き合っている肖像画に描かれた人物、つまり第3詩節の近世諸侯(おそらく男性)の<髪と眼差し>や<口>もとの過ぎない。ベンヤミンの巧妙な引用術の典型といえる。



Bildnis eines Mannes von David (Octavius Hill)

ある男の肖像、デイヴィット(オクタヴィアス・ヒル)撮影

Oder man schlägt das Bild von Dauthendey, dem Photographen, auf, dem Vater des Dichters, aus der Zeit des Brautstands mit jener Frau, die er dann eines Tages, kurz nach der Geburt ihres sechsten Kindes, im Schlafzimmer seines Moskauer Hauses mit durchschnittenen Pulsadern liegen fand. Sie ist hier neben ihm zu sehen, er scheint Sie zu halten; ihr Blick aber geht an ihm vorüber, saugend an eine unheilvolle Ferne geheftet.

語彙

aufschlagen「～を開ける、めくる」/der Brautstand「婚約期間、婚約中」<die Braut「花嫁」+ der Stand「位置、立場、状態」/eines Tages「ある日」(名詞の 2 格)/Moskauer「モスクワの」<Moskau「モスクワ」に er の語尾を付けたもの。例 Berlin/Berliner, Bremen/Bremer など/durchschnitten<durchschneiden「切断する」(非分離動詞)/Pulsadern<die Pulsader「動脈」<der Puls「脈、脈動」+ die Ader「血管、鉦脈・葉脈など網目上のもの」/an 3 格 vorübergehen「3 格を通り過ぎる」/augend<saugen「吸う」/unheilvoll「災いに満ちた」<das Unheil「不幸、災禍」+ voll「満ちた」/geheftet<～を an 4 格 heften「～を 4 格に留める、付ける」

文法注釈

Oder に始まり fand に終わる長い文は、主文が man schlägt das Bild von Dauthendey aufであることを理解する必要がある。使われる分離動詞 aufschlagen の前綴り auf の前後に固有名詞 Dauthendey (3格) の同格語 dem Photographen と dem Vater des Dichters が配置されるという手の込んだ構造。この文は要求を示すものだが、要求話法につきものの接続法第一式 man schlage を使わずに、直説法現在 man schlägt による「言明(平叙)文 Aussagesatz」が使われている。さらに aus der Zeit des Brautstands mit jener Frau「あの女性との婚約期間中の」と写真(Bild)の由来を補足説明し、そしてさらに jener Frau を先行詞とする関係文 die er dann eines Tages, kurz nach der Geburt ihres sechsten Kindes, im Schlafzimmer seines Moskauer Hauses mit durchschnittenen Pulsadern liegen fand. が続いている。関係代名詞 die は 4 格、er は写真術師 Dauthendey を指している。つまり「彼はその女性が liegen しているのを見つけた(fand)」という構造。finden は sehen, hören などと同じく知覚・感覚を表わす動詞なので、zu のない不定詞を目的語とする。その場合 4 格目的語を伴う。この文では関係代名詞の die が 4 格目的語だが liegen という動作の主体(意味上の主語)を示している/Sie ist hier neben ihm zu sehen<sein + zu 不定詞は「されうる」、「されねばならない」。/saugend an eine unheilvolle Ferne geheftet. saugend は現在分詞ゆえ「能動・継続」の意味、geheftet は他動詞の過去分詞ゆえ「受動・完了」の意味となる。saugend の前に ist を補えば、ihr Blick ist ----geheftet「彼女の視線は釘付けになったままなのだ」と状態受動の文章と理解することができる。

順送り訳

あるいはダウテンダイの写真を開いてほしい、写真術師で作家の父親だった人(の写真を)、あの女性との婚約時代の、その女性を彼はその後のある日、彼女の6番目の子供を産んだ直後、モスクワ

の家の寝室で、切断された動脈とともに横たわっているのを発見した。彼女はここでは彼の隣に見え定る、彼は彼女を支えているように見える。(けれど)彼女の視線はしかし彼を通り過ぎている、(その視線は)ある不幸な遠方に吸いつくように釘付けになったままなのだ。

ベンヤミンが言うのは、先に紹介したドイツ人写真術師カール・ダウテンダイが婚約したばかりの女性と撮った写真である。なるほど確かにダウテンダイに体を支えられている女性は、ダウテンダイの目を見つめるのではなく、遠くのほうを眺めているようにみえる。この女性にはモスクワの自宅で動脈を切って自死するという運命が待ち受けており、それを見通しているように見えるとベンヤミンは言うのだが、これは二重の誤りに基づく推論に過ぎない。確かにダウテンダイの妻は自死するが、場所はモスクワではなくサンクト・ペテルブルク、しかも自死するのはダウテンダイの最初の妻で、遠く(Ferne)を眺めているかに見える写真の女性は、実は二人目の妻となる予定の婚約者フリードリヒ嬢なのである。その後この夫人を伴ってダウテンダイはドイツ、ヴェルツブルクに帰国している。写真の彼女は乳飲み子を残して自死するという不吉な未来には無縁な女性だった。

(以下次号へ: 訳者)

.....
【著者紹介】

三ツ木道夫(MITSUGI Michio):

1953 年生まれ。上智大学大学院文学研究科満期退学。博士(比較社会文化)(九州大学)、編訳書『思想としての翻訳』(白水社 2008 年)など。

書肆春陽堂刊『伊曾保物語』「序詞」と「伊曾保物語の考」 解題と翻字

北代美和子
(翻訳家)

1. 解題

以下は明治 19 年(1886 年)に東京京橋区南傳馬町の書肆春陽堂より刊行された『伊曾保物語』巻頭の「序詞」および「伊曾保物語の考」(以下「考」とする)の翻字である。原典は変体仮名、総ルビで、句読点はない。翻字にあたっては句読点を適宜補った一方で、ルビは省略。現在と読み方が大きく異なる場合のみ、漢字に続けて読み方を()内に示した。仮名遣いは歴史的仮名遣いのままとした。原典は国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧できる(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/896660>)。

本書は全 113 ページ、イソップ寓話のうち「考」で言及される「かはつか主君を望む事」など 42 話を収録、そのうち 26 話に滝村弘方の挿画が付されている。翌明治 20 年(1887 年)には『密畫挿入 伊曾保物語』として第 2 版が出版された(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/896661>)。第 2 版は第 1 版とは 1 行の文字数と 1 ページの行数が異なるが、「序詞」「考」本文とも第 1 版と同文である。第 1 版の奥付には編集人として「朝野新聞社員 大久保常吉」、出版人に「春陽堂 和田篤太郎」の名がある。書誌情報の詳細については武藤(1997、p.124)を参照されたい。

イソップ寓話の日本語訳はキリスト教布教のために来日したイエズス会士が文禄 2 年(1593 年)に刊行した『Esopo no Fabulas』(天草本『伊曾保物語』)が現在に残るもっとも古い版である。近年の研究では、この天草本の以前に祖本として「原・伊曾保物語」があったとする考え方が主流を占めている。慶長・元和(1596 年－1624 年)のころに、「原・伊曾保物語」の流れを汲む古活字版『伊曾保物語』が成立したと考えられ、万治 2 年には挿画入りの一枚板製版本『伊曾保物語』が出版された。その後も江戸期を通じて多くの版が刊行されている。

明治にはいると、早くも明治 6 年(1873 年)に渡部温が Thomas James による英訳 *ÆSOP'S FABLES* を底本として、新訳『通俗 伊蘇普物語』を出版する。巻頭に訳者の「例言」があり、翻訳の目的や目的に合わせた実践的な翻訳方針、表記上の約束事などが列記されている¹。渡部はこの翻訳の出版に先だって、沼津兵学校英語方教授時代の明治 5 年(1872 年)に、英語原文を翻刻印刷しているが、この英語版をのちに『通俗 伊蘇普物語』の版元である書肆山城屋佐兵衛が販売したと思われる(谷川、2001、p.279)。

今回、収録した春陽堂版『伊曾保物語』は明治期の出版ではあるが、『通俗 伊蘇普物語』

とは異なり、西洋語原典からの新たな翻訳ではない。「序詞」および「考」によれば、日下部鳴鶴所有の絵巻本『伊曾保物語』三巻を、絵入朝野新聞編集者の武内馬溪が借り受けて、同紙に掲載したところ好評だったので、春陽堂の主人が書籍としての出版を計画、出版の心得があった絵入朝野新聞社員の大久保夢遊(常吉)が実務と編集にあたったという。大久保は読みやすさを求めて、原典の平仮名を漢字に改め、意味をとりやすくした。

大久保夢遊は嘉永6年(1851年)生まれ。櫻洲とも号した。大久保夢遊、あるいは大久保常吉名義で、政治評論から史伝、政治小説、心理小説、空想小説まで幅広い分野の著作で活躍。また撫松居士服部誠一の校閲を受けて、ガリヴァー旅行記の翻訳『大人國旅行 南洋漂流』を明治20年(1887年)に新古堂より出版している(池田、2010)。大正13年(1924年)没。

「考」を執筆した前田香雪については、吉田香雨が明治24年(1891年)に『当世作者評判記』の「香雪散人 前田健次郎君」の項で、書と骨董の鑑定に優れ、和歌をよくし、和文和歌の技量にはおよばないものの小説も書く「我が文學會中多技の人なり」(吉田、1891、pp.32-33)と評している。香雪は明治11年(1878年)に「東京絵入新聞」に連載され、日本初の「新聞小説」と言われる『金之助の話説(きんのすけのはなし)』の作者のひとりとされる。また大正15年(1926年)刊の『明治大正文学美術人名辞書』に以下の記述がある。

前田香雪

東京の人。天保12年正月生れた。名は夏繁、香雪と號した。通稱は健次郎。明治初年『繪入朝野新聞』を起こし、又龍池會の組織に畫し、爾來美術界では日本美術協會委員副長、東京彫工會幹事兼講師、日本漆工會考査委員、日本金工協會、鑑定會、好古會等の創立に何れも與つて力あり、専ら國粹美術の發揮に努力した。第四、五回の内國勸業博覽會に審査員となり、美術學校の講師及古社寺保存會委員となつたこともある。又夙に國學詩文に通じてあつた。大正五年十二月年七十五で病歿した。

国立国会図書館デジタルコレクションに収蔵されている香雪関連書籍には『不思議の利刀(ふしぎのわざもの)』(明治22年/1889年)や『梅ぞの』(明治24年/1891年)などの小説作品があるほか、美術工芸に関する雑誌等にその名が多く見られる。「考」のなかでかなりの字数を費やして、日下部鳴鶴所有の原典の装丁や紙質、筆法を論じ、鑑識眼と知識とを披歴しているところは、まさに鑑定家香雪の面目躍如といったところである。

さて翻訳についての論述に目を向ければ、香雪はまずわが国における翻訳の開始時期を問う。「かつて基督教の布教が許されていた時代には、九州で基督教の経文などを口述筆記したことがあったようだが、禁教とともにすべて焼却された。わずかに残っていても、翻訳ではなく、西洋語をそのまま書き留めたものである。その後、蘭学が起こるとともに、長崎で蘭方医などにより翻訳がおこなわれていたことは知っていたが、それ以前に西洋語からの翻訳があったとは思ひもかけなかった」というのである。ここで香雪が「海外の國」「外國」の「詞」と呼んでいるのが西洋諸語であることは明白であり、中国語(漢文)はそのなかにはいっていない点に注目したい。この時代の教養人である香雪にとって、漢文は「外國の詞」ではなかった。

香雪は続けて、本文の翻訳について原文との比較も交えて論じる。題名の「イソップ」に「伊曾保」の文字をあてはめて日本風に行っていることを評価し、また最近、日本にもたらされた「原書」と比較して、「原書」とは異なるどころ、欠けているところがあると指摘する。さらに「かはつか主君をのそむ事」(蛙が主君を望む事)の例をあげて、「原書」の「鷺」が「鳶」に変更されている点に注目し、翻訳者は日本では「鷺」よりも「鳶」のほうが適切だと考えたのだろうかとの推測をめぐらせる。ここで香雪が参照した「原書」がなにかは不明だが、前述のとおり明治初期には渡辺温による英文の翻刻があり、またイソップ寓話は英語の学習用リーダーとしても使用された²ので、香雪が英文に触れる機会があったと思われる。ちなみに『通俗伊蘇普物語』では「鷺」と訳されている。

「伊曾保物語」の訳者が「鷺」を「鳶」とした意図は知りようもないが、香雪がそれを現代の翻訳学の用語で言えば domestication にあたる翻訳戦略と解釈したことは興味深い。香雪は、外国の文章を翻訳するさいには、わかりやすいことが重要なのであり、そのため本書では直訳ではなく意識をしていると考えた。ちょうどこのころ森田思軒は「翻譯の心得」において、foreignization にも通底する考え方を述べていた(齋藤、2010、p.86)。翻訳の実践者ではない香雪と翻訳の実践者である思軒が同時期にそれぞれ異なる翻訳観を開陳していたことになる。

さらに香雪は、『伊曾保物語』の文体を、訳文は古びてもいないし、かといって過剰に俗っぽくもないと評価したあと、装丁や文字の書きぶりから、制作年代を室町時代と推定できないこともないが、当時、西洋語の翻訳ができる学者がいたとは思えないと言う。「この本は基督教の宣教師から口伝えに教えられたものを日本語にして書き留めたのではないか。そして内容は基督教とは関係がないが、修身の教えとして読んでいるうちに、基督教にも興味をもつと考えて、最初にこの本を教えたのだろう」と、翻訳の意図を推測して論考を閉じている。

本書が出版された明治 20 年前後、すでに多くの翻訳の実践者が、みずからの翻訳観、翻訳方針、具体的な方法などについて意見を述べていた。しかし前田香雪の「考」は、翻訳の実践者ではなく、その読者による翻訳批評として一読にあたいすると考える。

2. 翻字

伊曾保物語序詞

この伊曾保物語は友人武内馬溪(たけのうちばけい)氏がかつて絵入朝野新聞の操觚³に従事されしとき、彼の有名なる鳴鶴日下部大人(めいかくさかべうし)の所蔵されしを切に請受け其紙上に掲載されしものなり。書肆春陽堂主人其珍書なるを嘉(よみ)し上梓して廣く同好の人に頒(わか)たんと予に其事を謀らる。予は元来朝野新聞社の社員なれば萬事出版上の事を周旋し、且つ其文章の平仮名多くして却て解しがたき箇所少なからざれば本字を加えて意義を補ひ、以て編輯の名義を紙上に載せることとはなりぬ。看官(みるひと)請ふ之を諒せよ

明治十九年一月中浣 大久保夢遊志るす

伊曾保物語

香雪散人記

○伊曾保物語の考(かむがえ)

海外(わたのと)の國々の書(ふみ)を我皇國(わがみくに)の詞(ことば)もて記し留むるわざは何れの時より創まりけむ。筑紫の國人(くにうど)の外國(とつくに)の教法(おしへ)まなびきて従い學ぶ頃には其道の神を拝(おうが)む詞など口づからに受得たる儘を記し留めし類(たぐい)は稀にありし様(よう)なれど、夫(それ)はた此教(このおしへ)をいたく禁(とど)め戒められし時、悉く取集めて焼き失はれしかば今に遺存(のこりとど)まれるはいと少し。されど此は只彼國の語(ことば)のままに記せるなれば、爲し易くしてありもすべき事なり。彼國の詞を我皇國の詞にうつしかへしは外國の學びのかつかつ開けたるより後(のち)の事なるべければ、荷欄(おらむだ)の國人(くにびと)の長崎に来れるに就(つき)て物學べる醫師(くすし)のたれかれの手に成れる者などこそ有(あり)もせめ。夫れより以前(まへ)にはつやつや⁴さる書有るべしとも思ひ懸けぬに疑はしと訝らるるまで奇(あや)しく珍(めずら)かなる書こそ世に現れけれ。其はこよなき書家(てかき)とおほやけにゆるされたる日下部鳴鶴のうしの此の頃或方(ころあるかた)より得られたる伊曾保物語の三卷(みまき)になむ有りける。イソツプなどはいはで伊曾保としも皇國の語(ことば)めきて記せるは故こそあらめとゆかしさに絵入朝野新聞社の武内(たけのうち)ぬしの借りもて来しを切に請ひて見るに表紙は紺紙に金泥もて蓮水艸(はちすみづくさ)などよしあるさまに描き、丹色(あかいろ)の標題(うはぶみ)に紅の唐糸の組紐(くみを)をつけ、から艸彫りつけたる減金(めつき)の軸を附(つけ)られたり。此紺紙の表紙より都(すべ)ての裝飾(しつらひ)は足利將軍の代の中頃より元龜天正の以前頃(まえごろ)までの歌物語ぶみの古寫本また仏經などに類多かる裝飾にて、是より上(かみ)なるはたくみにすぐれたるものあれど、又時代の下れるは同様(おなじさま)なるも、何處(いずこ)か劣るところ見ゆるは古き草紙巻ものの類に心とどめて見識(みし)れる人は熟知(よくし)ることぞかし。紐とき開きて見るに料紙は鳥の子紙の厚ごえたる⁵に金銀泥もて梅の花を密(しげ)くも粗(まばら)にも描き、先(ま)づ目録をあげ、さて本文を記したり。其順序(そのついで)を見るに近く此方(こかた)に船載(わたりき)たれる原書(もつつふみ)とは異なる處(ところかけ)たる處あるのみか、比譬(たとひ)に引(ひけ)る物などにもかはれるがあるは、蛙(かはづ)が主君(あるじ)を望みて柱を得、また改めて鷺を授けられしといふを鳶にかへし類にて、此方(こなた)にては鷺よりも鳶の方相應(かたふさわし)と思ひてかへぬるにや。意殊(こころこと)なる外國人(とつくにびと)の作れる書をうつし記さむには覺(さと)り易(やす)きを旨とすべければ、彼(かの)直譯にはあらで意譯といふかたにせしなるべし。原書と併せ見ば、斯(かか)る處猶ほ多からむ。詞いたくも古めかず、然(さり)とてむげに卑(いやし)ともあらず。筆づかひゆるらかにて、世に飛鳥井流といふに似かよひたり。飛鳥井流は世尊寺家の筆法を受け傳(つたへ)て、飛鳥井の雅親(まさちか)朝臣の書き出給(いでたま)へる筋をいふ稱(となへ)にて、世に榮雅流ともいひ倣(ならへ)り。榮雅は則(すなは)ち雅親朝臣の法名にて、東山義政(よしひさ)と世を同じくし應仁文明の比の書家にて其流れを汲む者もい

と多かりけり。されば初めに足利時代の中頃より元龜天正以前の裝飾なりといひしは此書の流(りう)と併せて考ふるも故なきことにはあらしかし。さて此時代に外國の書読み解きて皇國の詞に移しかふる博士(はかせ)はありとしも覺えず此卷あり。疑ひ惑はじと思へど論(あげつら)ふべき證(あかし)の乏(とも)しきを如何(いかに)せむ。されど強(しひ)て考ふるに是も亦彼(またかの)耶蘇の教法(おしへ)の行はれし頃、外国人の口づからに教へられしことを何人(なにびと)かよく質問(とひただ)して斯(か)く皇國詞(みくにことば)もて書記(かきしる)ししならむ。此書よ彼國の教法書(おしへぶみ)には非(あらざ)めれど、齋(ひと)しく身を修むる補助(たすけ)となりて、教法の上にも協(かな)へる書なれば面白しと見、をかしと讀むうちに、教法の方(かた)にも心傾ぶくべききはひ⁶にとて先づ此書をや授けつらむ

.....

【著者紹介】

北代美和子(KITADAI Miwako)

翻訳家。日本文藝家協会会員。日伊協会イタリア語講座講師。上智大学大学院外国語学研究科修士課程修了。訳書に『名誉の戦場』『石を聴く』『嘘と魔法』『シャルル・ドゴール伝』など。

.....

【註】

1. 渡部温の「例言」は柳父章/水野的/長沼美香子編(2010)『日本の翻訳論 アンソロジーと解題』法政大学出版局、pp. 54-58 に収録されている。
2. たとえば、河島敬蔵注釈『英文伊蘇普物語注釈』浜本明昇堂、明治 36 年(1903 年)。ここでは「鷺」にあたる英語は heron である。
3. 操觚 : 文章を作ること。
4. つやつや : まったく、少しも。
5. 厚ごえたる : 厚つ肥ゆる。厚くふくらむ。厚ぼったくなる。
6. くさはひ : くさい(種)。物事の種となるもの。

【参考文献】

池田一彦(2010)「大久保夢遊『文明開化地獄極楽一周記』を巡って」成城國文学論集第三十三輯 pp. 85-124

小堀桂一郎(1978)『イソップ寓話 その伝承と変容』中公新書

加藤康子・三宅興子、高橋厚子(2010)「日本・イギリス・フランスにおける絵本の国際比較研究—「イソップ寓話」をめぐる—」科研費報告書

齋藤美野(2010)「森田思軒「翻譯の心得」解題」柳父章/水野的/長沼美香子編『日本の翻訳論 アンソロジーと解題』法政大学出版局 pp. 83-87

中務哲郎(1996)『イソップ寓話の世界』ちくま新書

府川源一郎(2017)『「ウサギとカメ」の読書文化史 イソップ寓話の受容と「競争」』勉誠出版

松本竜之助編(1926)『明治大正文学美術人名辞書』立川文明堂、pp. 735-736 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1018982>

武藤禎夫(1997)『絵入り伊曾保物語を読む』東京堂出版 p.124

柳父章/水野的/長沼美香子編(2010)『日本の翻訳論 アンソロジーと解題』法政大学出版局

吉田香雨(1891)『当世作者評判記』大華堂、pp.32-33.国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/872074>

ローレンス・マルソー(2021)『絵入卷子本 伊曾保物語—翻刻・解題・図版説明—』臨川書店

渡部温訳・谷川健一解説(2001)『通俗 伊蘇普物語(東洋文庫 693)』平凡社

エッセイ

エドガー・アラン・ポー『アッシャー家の崩壊』の翻訳比較 (II)

水野 的

本稿では Edgar Alan Poe の *The Fall of the House of Usher*『アッシャー家の崩壊』の邦訳を素材にして、談話構造と情報構造の視点から通時的な翻訳比較を行う¹。第二例は第一例のすぐ後のパラグラフである。原文は文法的には特に難しいわけではない。以下は簡単な構文解析を施してある。

I have said (1) [that the sole effect of my somewhat childish experiment—(that of looking down within the tarn)--had been to deepen the first singular impression](2). There can be no doubt (3) [that the consciousness of the rapid increase of my superstition (4)—(for why should I not so term it?)—served mainly to accelerate the increase itself](5). (6) Such, (I have long known), is the paradoxical law of all sentiments having terror as a basis. (7) And it might have been for this reason only, [that, (when I again uplifted my eyes to the house itself, from its image in the pool,) there grew in my mind a strange fancy] —a fancy so ridiculous, indeed, that (8) I but mention it to show the vivid force of the sensations [which oppressed me]]. (9) I had so worked upon my imagination as really to believe [that (about the whole mansion and domain) there hung an atmosphere peculiar to themselves and their immediate vicinity]—[an atmosphere [which had no affinity with the air of heaven, but which had reeked up from the decayed trees, and the grey wall, and the silent tarn]--a pestilent and mystic vapour, dull, sluggish, faintly discernible, and leaden-hued].

情報構造分析

(1) 主節+従属節であり、伝達の中心は *that* 以下にある。*that* 以下のことを「私は言った」というのだが、*that* 節の中の(2)“the first singular impression”が具体的に何のことなのか、すぐには分からない。前の文の前置詞句、“with a shudder even more thrilling than before”がそれに対応するように思えるが、今度は“than before”が問題になる。これは何を指すのか？これに対応する箇所を見つけるためには、物語の冒頭の第2文にまで遡る必要がある。“I know not how it was --- but, with the first glimpse of the building a sense of insufferable gloom pervaded my spirit.”がそれに当るだろう。Irwin(2006)は“(the first singular impression) of gloom and of the mansion”と書いている。以下のすべての訳で“singular”がどう訳されているかを二重下線で示してある。これを見るとおそらくすべての

¹ 本稿の理論的立場については水野(2023a)、水野(2023b)、水野(2019)を参照。

訳者が、そこまで遡って該当箇所をつきとめようとはしておらず、“singular”を辞書で引いて適当な訳語を与えている。ただし、これはポーの書き方にも問題がある。

(3)も主節+従属節であり、文の伝達の中心はthat以下にある。“There can be no doubt”は「確かに」ではなく「たぶん、おそらく」の意であり、文副詞に近い。(4)は訳語の問題があるsuperstitionをたんに「迷信」とすべきかどうか。実際の訳では「迷信」が圧倒的に多いが、英語のsuperstitionには「恐怖」の意味が織り込まれている。「迷信」とするだけではその意味がこぼれてしまう可能性があるし、(6)の“all sentiments having terror as a basis”との結束性が保証できなくなる。

(4)(5)(6)で、ポーは「(おそらく)私のsuperstitionが急速に増大していると意識したこと」が「その増大をさらに加速させたのだらう」、それが「恐怖が根底にあるあらゆる感情の逆説的法則」なのだという。ここもわかりにくいかもしれない。普通は何かを意識するということは、意識の対象を客観化(対象化)して扱いやすくすることであるが、この場合は意識すれども客観化(対象化)できず、むしろ対象にとられてしまうということだから、その意味で「逆説的」と言っているのであろう。Irwin (2006)はこの意識を“his own self-consciousness ‘of the rapid increase’ of his ‘superstition’”、つまり「自己意識」としてとらえている。たしかにポーはここで、対象を客観化してそれから離れることができない自分を意識しているということもできる。しかしそれは自己意識と言えるかもしれないが、事後的なものである²。なお(6)では“Such”がThemeであり、“I have long known”は挿入句である。

(7)の文は主節+従属節で、従属節の内部にwhen節(副詞節)と同格節を含む。前の文との結束性が間接的になっており、何かつなぎの言葉を入れた方がいい。(8)は副詞のbut(とにかく…するだけ)によって主節にも意味の重点が置かれるが、後続の不定詞句は結果を示し、関係詞節もついて長くなっているのだから、順送りがふさわしい。(9)は長い文であるが、基本は主節+従属節(that節)であり、that節の中に関係詞節を含む同格節があるという構造である。同格節の前までの部分は比較的長いから、that以下は試訳のように従属節から主節へと訳し上げてても可読性に問題はない。“an atmosphere”は不定名詞であり、意味の重点はpeculiar以下とその後の同格節にある。「ある種の気体」と出しておいて、それを具体的に説明していく。

試訳は次のようになる。

試訳

今言ったように、私のいくぶん子供じみた試み—池を覗き込んでみるという試み—その唯一の効果は、最初の陰鬱な印象をさらに強くしたことだけであった。おそらくは、私の「迷信」(奇怪で不合理な恐怖感)—そう言っていけない理由があるだろう—それが急速に増大したという意識が主にその増大そのものを加速するのに与ったのだ。それこそ、とうにわかっていたことではあるが、(私のsuperstitionがそうであるように)恐怖が根底にあるあらゆる感情の逆説的法則なのだ。そして、おそらくはこれだけの原因で、私が池に映った館から現実の館に目を上げたときに、私の心の中に奇妙な妄想が浮かんだのだらう。それが実際あまりにばかげたものだったから、(それを)あえて話すことで

² ポーには『マルジナリア』の中に「ヘーゲルと哲学」という断章があるが、そこでのヘーゲルの引用についてはfake説もあるぐらいで、ポーが自己意識まで考えていたとは思えない。

私を圧迫した感覚がいかに生々かったかを示すしかない。(それはこういうことだ)私はあまりに想像力にとらわれていたため、ある種の気体が館と地所、そしてその近辺だけに漂っていると思ったほどだった。その気体は天空の大气とはまったく違って、朽ちた木や灰色の壁、沈黙した池から浸み出してきていた。それは有害で、神秘的な蒸気であり、くすんで、動きが鈍く、やっと感知できるほどで、鉛色をしていた。

以下、既存の邦訳を年代順に見ていく。

岡田實麿(訳)(1913 T2)『甲蟲・渦巻・没落(世界短編傑作叢書第壹巻)』(北文館)

「(1)私のやゝ子供めいた実験—沼を見込んだ唯一の結果は、前にも云つた通り、変妙な第一印象を強めただけであつた。(2)これを迷信と云はないで何と云はう—迷信が大きくなつた迄であると覺つても、無論それは、迷信の大きくなる度合を速めるより他は無い。(3)尤も斯ういふのが、恐怖を土台にした凡ての心持の逆語的法則だとは、私は夙の昔から知り抜いてゐたのである。(4)で沼に映つた家の影から眼を挙げて、本当の家を見やつた時、頭脳の中に一種妙な空想が生つたのは、たゞ今云つた法則の所為からばかりで有つたかも知れない—この空想たるや全たく(5)途方も無い空想で、私はたゞこの時自分を庄してゐた心持の恐しい力を云ひ現はさうがため、(6)これを書き列ねるに過ぎないのである。その、私の周した想像といふのはかうである。つまり、この屋敷全体から領地の周囲、その建物だの近傍の土地に一種独特の空気が柵曳いてゐる。普通の空気とは全で異つて、朽ちた木だの、鼠色の壁だの、寂りかへつた沼などから立ち昇つた空気—疫病を醸すやうな、神秘めいた、懶い、鈍よりした、見えるか見えないかの鈍色の水蒸気がそれであつたのである。」(205-206)

(1)では主節の“I have said”が「前にも云つた通り」と挿入句になっている。(2)では「迷信の急速な増大を意識する」→「そのことがさらに増大を加速する」という意味合いが消えて、あいまいな文章になっている。「無論それは」は“There can be no doubt”に対応する表現と思われるが、それならば位置がおかしい。(3)(4)は主節と従属節が逆転する訳し上げ。(5)「途方も無い空想」と言う訳語は意味がずれている。(6)は不定詞句の訳し上げである。

谷崎精二(1913/1920)「アツシア—館の滅落」(『赤き死の仮面』)(言誠社書店)

(*原文は総ルビであるが、特徴的で必要な個所のみ残した。)

私は自分の聊か馬鹿らしい経験—即ち沼の中を覗き込んだ事—が最初の気味の悪い印象を強めた(1)と云つた。勿論自分の迷信が急速に強くなりつゝあると云ふ事の自覚が—如何して迷信と呼ばずに居られよう?—却つて益々その強さを深めたに(2)違ひなかつた。すべて恐怖から成り立つ諸々の感情は皆かうした—見矛盾した径路を執ると云ふ事を(3)私はよく先から知つて居た。斯くて

私が水に映つた影から再び本物の家へ眼を移した時、私の心に不思議な空想が—実際馬鹿らしい空想で、私は唯その時私を苦しめた感情の威力を明白に示さん為(4)述べるのである—起つて来たのもやはり(5)此の理由に基いたに過ぎぬのかもしれない。私は何處迄も自分の想像に信頼して、竟に屋敷及びその極く近辺に特有な一種の大気—大空の其れとはまるで打つて変つた、朽ちた樹木や、古びた壁や、さては静まり返つた沼地等から蒸発した大気—くすんだ、不活発な、殆ど気が付かれぬ様な、しかして鉛色をした、有害な神秘的な蒸発気—が屋敷の周囲全体に立ち罩めて居るのだと(6)信ずるに至つた。」(112-113)

(1)(2)(3)は主節と従属節が逆転する訳し上げ。第1文では”the sole effect of”が訳されていない。(5)も主節の“it might have been for this reason only”を訳し上げている点と同じだが、さらに同格節まで訳し上げ、同格節の中では不定詞句を訳し上げている。可読性はかなり低い。「何處迄も自分の想像に信頼して」はやや意味がずれている。

谷崎潤一郎(1918 T7/2018)「アッシャー家の覆滅」(『谷崎潤一郎怪異小品集 変身綺譚集成』(平凡社))

(1)先にも云つた通り、私のやや子供じみた実験が齎した唯一の結果、—あの古沼の水面を瞰おろした後の感じは、最初の不思議な印象をますます強したに過ぎなかった。(2)私が自分の迷信の、—そうだ、迷信と呼んでも差支えはあるまい。—急激に増進しつつあるのを意識すればするほど、それは結局増進その物の速度を倍加させるに過ぎない事は明らかであつた。(3)そういう風になるのが、凡べて恐怖を根底にして居るあらゆる感情に共通な、奇妙な原則である事を、私は長い経験に依つて知つて居る。(4)そして大方それが原因であつたのかも知れないが、私が水たまりの影像から目を離して実際の家を見た時、忽ち其処に或る怪しい幻想が私の心に浮かび上がったのである。(5)その幻想はいかにも荒唐無稽なもので、その折の私の胸が、どれほど生き生きとした力強い感情で充たされて居たかを示す為めに、(6)私は茲に一言せざるを得ないのである。私は実際、(7)その邸宅や領地の全体が、その一区域に特有な一種の空気、外界のものとは違つた、朽ち腐つた樹木や、灰色の土塀や、黙々たる古沼からじめじめと這い上る空気、—だるい、ものうい、微かに其れと分るような、鉛色をした、毒瓦斯のような神秘的な水蒸気の中に、包まれて居るかの如く想像したのであつた。(281-282)

(1)は主節を格下げして順送り、(2)(3)は訳し上げであるが、(4)は再び順送りになっている。ここでは同格の処理も順送りでも可読性が高く、(5)の「その幻想」との結束性もよい。(6)は不定詞句を訳し上げている。(7)は長い訳し上げになっており、最後の文は”so worked upon my imagination as really to believe”という形の意味を表していない。

吉田兩耳(1925/1939)「アツシヤ館の崩潰」(『黄金虫』)(博文館)

(*総ルビであるが、必要と思われる箇所のみ残した。)

前にも述べたことだが、水溜りを覗いて見たといふ私のした少々子供じみた行爲の唯一の結果は最初の奇妙な印象を深めただけであつた。私の迷信—どうもさう云ふより外に仕様がな—私の迷信がずんずん増して行くといふ自覺が、主として増加それ自身の速度が増す役をなしてゐたことは(1)疑ひを容れぬ所である。これが、恐怖を基礎としてゐるあらゆる感情の矛盾律であることは、(2)在來の經驗上自分の知つてるところである。(3)そして又このためでもあつたらうか、水溜りの影から眼をあけて建物を見ると、(4)私の心に不思議な空想が一實に滑稽な空想であるが、その際私を壓迫した感じが如何に力強いものであつたかを示すために、此處に挙げるのであるが—不思議な感じが私の心に生じた。(5)私は想像を働かすと、邸内全部の上には、建物及びその附近の特有な空気が懸つてをつた。それは大空の空気には少しも似もやらず、朽木、灰色の壁、寂寞たる水溜りなどからいきれ立つところの鈍い、のろのろした、鉛色の、微かな、不思議な瘴癘の氣であつた。(259-260)

(1)(2)は主節と従属節が逆転する訳し上げである。なお、波下線を付した「矛盾律」は英語では law of contradiction であり、「Aは同時に非Aであることはできない」ことを指すから、意味が違っている。以下の幡谷、龍膽寺、西村も「矛盾律」を使っているが誤り。(3)は順送り。(4)は同格節の処理に失敗している。(5)の文は、主節“I had so worked upon my imagination as really to believe”の意味を十分に訳出していない。

幡谷正雄(1926 T15)『アツシヤ家の没落(英文学名著選 8)』(健文社)

前にも述べたことだが、私の稍子供らしい実験—沼の中を見下したといふことの結果は、唯最初の不思議な印象を深くするにすぎなかつた。私の氣の迷ひ—さう名付けずにはゐられないではないか?—が急速に増して来たといふ自覺は主として増加其物に更に速度を加へるに役立つたといふことは(1)疑ひを容れぬ所である。元來恐怖をもつてゐるあらゆる感情は、かうした矛盾律をもつてゐることは(2)私の以前から知つてゐることである。私が沼に映つた家の影から、目を投げて本物の家を見た時に、私の心に不思議な空想—實に馬鹿らしい空想であつたので、唯私を悩ました感覺の活明な力を証明するために(3)書き述べようと思ふ—が起つたのも、(4)唯この理由からであつたかも知れぬ。私は全く自分の想像に信賴し、終には其屋敷と其構内とには、これら及びその極近辺に特有な一種の雰囲氣—空の空気とは似もつかず、枯れ木や、灰色の壁や、寂寞の沼から立ち昇る濛氣—物憂い、澱んだ、殆ど見分け難い、鉛色をした、毒々しい、不思議な瘴氣—が垂れ罩めてゐると(5)実際に信ずるに至つたのである。」(和訳 10-11)

ほとんどが訳し上げであることに加えてダッシュが多すぎ、読みにくい。(1)(2)(4)(5)は主節と従属節が逆転する訳し上げであり、(3)は不定詞句の訳し上げである。理由はわからないが、最後の部分の

連続する形容詞の順序を入れ替えている。波下線部の「自分の想像に信頼し」は谷崎精二の訳とまったく同じである。

渡辺温・渡辺啓助(訳)(1929/2019)³「アッシャー館の崩壊」(『ポー傑作集 江戸川乱歩名義訳』)
(中公文庫)

(＊原文は総ルビであるが、必要な個所のみ残した。)

私は自分の多少子供じみた試み—沼の中を覗き込んだ結果が、只管ある訝しな最初の印象を強めたばかりであると(1)言つた。私のさうした迷信—どうしてさう呼ばずにみられやう？—が急速に増長しつつあると言ふ意識が、いよいよ以てその増長を^{はかど}撻らしめたことは(2)疑ふべくもなかつた。さうした撞着的な法則が恐怖に根ざした凡ての感情に行はれることを、(3)私は以前から知つてゐたが、(4)矢張りこの理由によつてであらう、私が池の表の映像から眼を上げて再び本物の家その物の姿を眺めた時、私の心の中には或る得体の知れない妄想が生れたのである—それは実際^{はなは}甚だ^ぼ莫^か迦^しげた妄想ではあるが、それでもそれがどれ程まざまざと私の心に迫つて来たかを(5)記して置く。(6)私は空想のまに、^{つひ}竟にその^{やかた}館の地所全体の上とその付近に一種異様な^{アトモスフィア}空^{おほ}気が蔽ひ懸つてゐるものと(7)真実信じてしまつた—一種の^{アトモスフィア}空^{おほ}気それは空の大気とはまるで似もつかぬもので、朽ち果てた樹々や、灰色の壁や^{げきぜん}闐然たる沼などから吐き出された、或る有害な、不可解な、^{もの}懶い、^{ほの}陰鬱な、^{ほの}仄かな、鉛色の蒸発気である。』(348)

(1)(2)(3)は主節と従属節が逆転する訳し上げ。(4)だけは主節を順送りしている。(5)は不定詞句の訳し上げ。(6)(7)は主節の一部を順送り、一部を訳し上げている。全体として細部の正確さに欠けるが、最後の長文の処理は妥当である。

百瀬 甫(訳・注)(1929 S4)『Prose Tales by Edgar Allan Poe with Notes and Translation by Hajime Momose』(廣文堂)

(1)私はすでにのべたのであるが、あの多少子供らしい試み—沼の中をのぞき込むといふ—の唯一の結果は、最初の^{おかしな}奇異な印象を深めるにすぎなかつた。私の迷信—迷信といふより外に呼びやうもないではないか？—が急速につのつて居るのであるといふ事の意識は、主にその増加に加速をあたへるはたらきをして居ることは、(2)疑ふべからざることである。かくの如く恐怖を根柢として居る、あらゆる感情の逆説的法則は、こう云つたものである事を(3)私は長い間承知して居るところである。で沼の中にうつつて居る家の影から眼をあげて再び家のそのものを眺めた時、私の胸のなかに奇怪な妄想がおこつて来たのは(4)外ではない、この理由によつたのであらう—ほんとうにばかばかしくつて、(5)それでお話するのも、たゞ私をなやました心持の強烈な力の程を示すだけにすぎないのだ。(6)私

³ 「アッシャー館の崩壊」を実際に訳したのは渡辺啓助のようである。渡辺温・渡辺啓助(訳)(2019)『ポー傑作集 江戸川乱歩名義訳』(中公文庫)の浜田雄介による巻末解説を参照。

は想像の力をひどく興奮させたので、その邸宅や所有地の一带にわたつて、その屋敷、土地及びその近接の附近独特な一種の雰囲気—天空の大気とは何等似もつかないもので、朽ちはてた樹、灰色の壁、そして静まりかへつた沼から立ちけふる濛気—毒気を含んだ、幽玄な瘴気で、どんよりとした、たどたどしい、おぼろげにそれと見わけらるゝ、鉛色(にびいろ)の気体—がたれ罩めて居るのであると、(7)ほんとうに信ずる様になつたのである。(115/117)

(1)は主節を、(5)は不定詞句を順送りしている。しかし他は訳し上げが目立つ。(2)(3)(4)は主節と従属節が逆転する訳し上げ。(6)(7)は主節の部分をつに二つに分けているが、「私は想像の力をひどく興奮させたので」と「ほんとうに信ずる様になつたのである」の距離が大きすぎる。'increase'を「つにつて居る」と「その増加」と二通りに訳しているためわかりにくくなっている。「sluggish」を「たどたどしい」を訳しているが、この文脈では意味が通じない。

佐々木直次郎(訳)(1931/1951)「アツシャア家の崩壊」(『アツシャア家の崩壊他九篇』)(角川文庫)

私のやや子供らしい試みの——沼のなかをのぞきこんだことの——唯一の効果がただ最初の奇怪な印象を深めただけであったことは(1)既に述べた。私が自分の迷信——さういってはいけない理由がどこにあらう？——の急速に増してゆくことを意識していることが、主としてそれの増すことを益々促すことになつたということは、(2)何の疑ひもないことだ。(3)このやうなことは、前から知つてゐたことであるが、恐怖を根柢としてゐるすべての感情に通ずる逆説的の法則である。そして、私が池の中に映つてゐる家の影から再び本物の家に眼を上げた時、自分の心の中に一つの奇妙な空想の湧き起つたのも、(4)あるひは単にこの理由によるものであるかも知れぬ。——その空想といふのは実際笑うべきもので、ただ私を悩ました感情の強烈な力強さを示すために(5)記すにすぎない。(6)私は想像力を働かして、この屋敷と地所とのあたりには、それら及びそのすぐ近傍に特有な雰囲気——^{おほそら}天空の大気と少しの類似をも持たない、そして朽ちた樹木や、灰色の壁や、ひつそりした沼などから立ちのぼる雰囲気——どんよりした、鈍い、ほとんど眼に見えぬ、鉛色の、有毒で神秘的な水蒸気——が一面に垂れこめてゐるのだ、と(7)ほんとうに信ずるようになつたのである。(168)

(1)(2)(4)は主節と従属節が逆転する訳し上げである。(3)は主節を順送りしている。(5)は不定詞句の訳し上げ。(6)(7)は百瀬と同様に主節の部分をつに二つに分けて訳しているが、やはり距離が大きすぎる。「私は想像力を働かして」は so...as...to...の持つ意味合いが失われている。

森村豊・澤田卓爾(1938 S9)「アツシャ家の崩壊」(『黒猫他六編』)(岩波文庫)

私の聊か大人気ない経験—沼の中を覗き込んだこと—の結果が、只管、最初の奇怪な印象を深めるばかりであつたのは、(1)既に述べて置いた。私の迷信が—さう呼んでならない理屈はなからう—急

激に増長した自覚が、却つて増長そのものをいよいよ促進させるのに役立つことは(2)疑ひもなかつた。根底に恐怖をもつすべての感情に関する逆説的な法則は、えてかうしたものであるのを(3)私は久しく経験してゐる。そして、沼に映る家の影から、再び家その物に眼を移した時、私の心の中には奇怪な妄想が湧いて来たのは、(4)単にかうした理由のためであつたかも知れない—(5)事実、馬鹿げきつた、妄想であるから、唯それを述べて、私を懊悩させた感覚の鋭い力を示すだけに留めて置かう。私は想像を逞しくした結果、邸宅と、莊園と、その付近とに特有な一種の大気—空の大気とは何のゆかりもなく、朽ちた樹木や、灰色の壁や、静寂な沼沢から蒸れて上る大気—鈍い、重たげな、ほんのり目につく鈍色の、毒々しい、不思議な濛気—があたり一面に澱んでみると(6)事実思ひ込むまでになつたのである。(32)

(1)(2)(3)(4)(6)はすべて主節と従属節の位置が逆転する訳し上げである。(5)の不定詞句だけは順送りになっている。

日夏耿之介(不詳)「アッシャー屋形崩るるの記」(東雅夫編『ゴシック名訳集成西洋伝奇物語』(学研 M 文庫)

*冒頭の断片訳があるのみで、この部分の訳はない。

葉河憲吉(訳)(1949 S21)「アッシャー館の崩壊」(『あひびき』)(出水書園)

(1)前に言つた様に、私の幾分子供じみた実験—沼の中を見下したと云ふ—の結果は唯最初の奇妙な印象を深めるに過ぎなかつた。私の迷信的な気持—さう呼んでならぬ訳は無いではないか?—が急速に増して来たといふ意識が、主としてさう言ふ気持ちの増加そのものに更に速度を加へることになつたのは、(2)疑ひを容れぬところである。恐怖を根柢とする凡ての感情が、かうした逆説的法則を有するといふことは、(3)私のずっと以前から知つてゐるところである。そして私が沼地に映つた家の影から、眼を挙げて再び家自身へ移した時、妙な幻想が私の心に浮んだのは、(4)唯々この理由からであつたかも知れぬ。実際余りにも馬鹿げた幻想なので、唯私を圧倒した感覚の力強さを示す為に(5)述べるに止めよう。(6)私は想像力を太いに働かせて、遂には、其屋敷と所有地との周囲一帯に、その家屋敷とその直ぐ近辺とに特有なある雰囲気—枯れ朽ちた樹々や、灰色の壁や、黙り込んだ沼から立ち昇つた、^{そら}天空の大気とは似てもつかぬある雰囲気が—鈍よりとした、澱んだ、殆んど見分け難い、鉛色の、毒気を含んだ(7)神秘的な濛気が、懸かつてゐる様に信ずるに至つた。』(123-124)

(1)の主節と(6)の部分(主節の一部)に順送りがあるが、(2)(3)(4)(5)(7)は訳し上げである。(7)では関係詞節を含む同格節を訳し上げているために、「私は」から述部までの距離が大きすぎる。

吉田健一(訳)(2021/ 1948 S23)「アツシヤア家の没落」『赤い死の舞踏会』(中公文庫/若草書房)

私は沼を覗き込むという私の聊か大人気ない試みの唯一の結果は私が屋敷を前にして最初に受けた印象を一層強くすることだったと(1)言った。(2)そして私は私の迷信、——何故ならそれは迷信と呼んでもいいことなのだから、——それが急激に強化されて行くことの意識はその作用を更に早める働きを持っていた。又これは恐怖に關聯した凡ての種類^の勘定を支配する法則であることを(3)私は経験によって知っていた。それで(4)或は他に理由がないことだったかも知れないが、沼に映っている家の像から眼を転じて再び家自体を見上げると、(5)或る奇妙な幻想が私の胸に浮んで、——それは実際に滑稽な幻想なので私が(6)それを茲で言うのは全く私をその当時悩ましていた各種の感情が如何に強烈だったかを示す為に過ぎない。即ち私は想像力が昂じるのに従って、屋敷全体とそれに附属している土地とは(7)それ等独特の気体に包まれ、——(8)それは普通の空気とは全く異っていて、枯れた木や、灰色の壁や、静まり返っている沼から発生し、——重い、揮発性が少い、鉛色をしていて微かに識別することが出来る、(8)有害な、神秘的な一種の蒸気であるということを(9)真面目に考えたのだった。(90-91)

(1)は訳し上げであり、singular を訳していない。(2)では“*There can be no doubt*”を訳しておらず、“*the consciousness of the rapid increase of my superstition*”の“*my superstition*”だけに挿入句をつなげたため、その後の代名詞の指示関係がわかりにくくなっている。最初の「それ」は「私の迷信」でいいとしても、「その作用」について読者は普通「迷信」と取るだろう。「急激に強化されて行くこと」ととらえるのは無理である。(3)は訳し上げ。(4)は順送りになっているが construal を変更している。(5)は文意をはっきりさせるために、切って文にしたほうがいい。(6)は順送りである。(7)と(8)は同格節の処理に失敗している。

龍膽寺 旻(訳)(1949 S24)「アツシヤア家の崩没」(東雅夫(編)(2012)『怪奇小説精華』)(ちくま文庫)

(1)前にも曰った事だが、聊か児戯に類する行為——^{いささ}戴ち沼を覗き込んだという事——の唯一の結果は、最初の奇異なる印象を深うしたということであった。私の迷信——どうもそう呼ぶより他に仕方がない——が漠然と^{ていか}通加を促したに(2)違いのないのだ。かかる事は、恐怖から成り立つ^{あら}綜ゆる感情の(a)矛盾律であるということを、(3)もとより承知している。

そして、(4)これも唯そういった理由からであるかもしれぬが、私が沼の水に映っている影から正面の建物へ^{まなこ}眼睛をあげた時に、心のなかに不可思議な空想が^わ滾き出でた。——(5)それは実に嚙うべき空想ではあるが、唯その時私の^わ気持を重くした感情が、如何に烈しかったかということを示す(6)ために曰うのである。(7)私は想像を働かして、屋敷の周りには、そのあたりに特有な(b)一種の大気が垂れこめていて、本気になって信ずるに至ったのだ。(8)その大気というのは、大虚に満つる空気とは似もやらず、朽樹や灰色の壁や、静まりかえった沼水から立ち昇る、物憂い、^{けたい}懈怠な、^{ほの}仄かな、

そして鉛色の瘴癘^{しやうらい}にして神秘なる^{ふんき}気^きである。(244-245)

(1)(4)(5)(7)(8)は順送り、(2)(3)は訳し上げである。訳出手法の一貫性はないが比較的読みやすい訳である。二重下線部(a)「矛盾律」は吉田両耳のところでも指摘したように、意味が違う。(b)は不定名詞の処理として妥当なものである。

松村達雄(訳)(1950)「アッシャー家の崩壊」(『世界文学全集 21 エドガー・アラン・ポー』)(河出書房)

池の中をじつとのぞき込むといったような、少々子供じみたわたしの実験も、あの最初の奇妙な印象を一そう深くするに役立つばかりであった。(1)とわたしは今述べたところだ。ところで、わたしの迷信じみた思い—そう名づけて何の差支えがあろうか—は急激につのってきたが、またつのとみずから意識することが何よりもそうした思いをますますつらせる結果ともなった。(2)これはたしかに疑いの余地もなかった。およそ恐怖感が根本原因となっているあらゆる感情には、すべてこうした逆説的な法則が存するものであるが、(3)このことはすでにわたしは久しい以前からよく知っていた。そしておそらくこうした理由からなのだろうか、わたしが池に映ったその像から、本物の邸そのものへとふたたび目をあげたとき、わたしの心には一種奇妙な妄想がつのってきた—じつに馬鹿げた妄想なのだが、この際わたしが感じた重苦しい感情がどんなに強いものだったか、(4)ただそれをまざまざ示したいがために強いて述べるのである。(5)それは、この邸やまわりの地所全体にはそれ自身およびそれに近接したものに独自の一種の大気がこびりついている—上空の大気とは似ても似つかない、朽ち果てた樹々や灰色の壁や鳴りをひそめた沼から沁み出てくる一種の大気—さだかに目にもとまらない、鉛色の、毒を含んだふしぎな瘴癘^{しやうらい}がどんより淀んだようにまつわりついている。…わたしにはそんな風に想像されて、もうすっかりそうだと信じ込んでしまうほどであった。(90)

訳し上げが多く、(1)(2)(3)に見られるように主節部分の後置が目立つ。(4)では不定詞句を訳し上げており、(5)では同格節を含む二重の訳し上げになっている。松村は『翻訳の論理』(31-33)の中で、自分の「アッシャー家の崩壊」の訳について書いているが、冗長さや説明について述べているだけである。なお筑摩版とは若干の異同があるが、大きな変更ではない。

西村光治(1950)「門番屋敷の倒壊」(堀田由之助(編)『アメリカ名作短編集』)(藤谷崇文館)

聊か子供じみた実験の結果、即ち此處から沼を見おろすと、先刻の只ならぬ印象をやわらげるところか深めることにさえなつたと(1)私はいつたが、(2)私は自分の迷信がつつて來たのだと自覺すると、かえつて更らに加速度的に迷信がつつて來た。(3)—これが迷信でないなどとどうして云えようか—こうしたことは、根柢に恐怖が存する感情にはよくある矛盾律という奴であることは(4)今さら悟つたわけではないが、私が今、家の水影から目を上げて本物の家を再び見上げると、一種の不思議

な空想がむらむらとわいて来たのも(5)件の矛盾律に他ならないと思つた。實にたわいのない空想なんだが、私を悩ます激しい感情の力を示すために(6)一寸述べよう。(7)それは、屋敷とその近旁一體(㊦)特有な一種の水蒸気が屋敷と庭の周圍にたちこめていたことだ。空の大氣とは違つたもので、朽ちた樹木や灰色の壁、寂として聲のない沼から生じた、陰氣な生氣のない、よく見ないと認められない、鉛色をした、一種毒氣のありそうな摩可不思議な水蒸氣だつた。(8)こんなことを實際に信ずるほど私の空想はこうじたのだ。(74)

(1)は主節と従属節が逆転する訳し上げ。(2)は主節の“*There can be no doubt*”を省略している。(3)は挿入句を理由なく移動しており、(4)と(5)は節と従属節が逆転する訳し上げ。(6)は不定詞句を訳し上げている。(7)は“*I had so worked upon my imagination as really to believe*”を別の文(8)として訳したため、前の文との間の意味的なつながりを失っている。ほとんど誤りである。波下線部では形容語句の入れ替えがある。

田桐大澄(1964)「アシャー家の崩壊」(『ポオ短編集』)(八潮出版社)

(1)前にも言った通り、沼の中をのぞき込む、このいささか子供じみた私の試みも、結局、はじめてアシャー邸を見たときの、あの奇怪な印象を、一層深めるばかりだったが、この私の迷信—まったく、迷信と言わざるを得ないではないか—(2)それは、迷信だぞと夢中で自分に言い聞かせれば言い聞かせるほど、ただますます迷いにはまりこんで行くばかりで、(3)これには疑いをさしはさむ余地もなかった。これが、恐怖に根ざすすべての感情に共通の逆説的法則である、ということは、(4)私はずっと前から承知していた。だから私が沼の水面にうつる邸の影から目を移して、再び視線を実物の邸のほうへ戻したとき、ある奇妙な考えが心中にわき上がったのは、(5)ただこのためだったのかも知れない。この奇妙な幻想は、あまりにもばかばかしいものだが、(6)このとき私を襲った恐怖の念の激しさを示したい考えからこれを述べるにすぎない。私は想像をほしいままにしているうちに、邸や邸の回りの土地や、そのあたり一面に独特の妖気がまつわりついていると心から信じてしまった。(7)天空の大氣とは似ても似つかぬ妖気が—朽ち果てた木々や、灰色の壁や、静まりかえる沼からかもし出される空気が—毒氣と靈氣を含んだ霧が—どんよりとよどむ、やっと目に見えるくらいの鉛色の霧なのだ。(9-10)

(1)は順送り。下線部が示すように、(3)(4)(5)では主節が、(6)では不定詞句が訳し上げになっている。(2)の波下線部分は解釈に問題がある。superstition が増大してくるのを意識することがかえって superstition を増大させるのであって、「迷信だぞと夢中で自分に言い聞かせる」ことが原因ではない。この場合の superstition とはアッシャー家を眺めるとき生まれる「不合理な恐怖」と考えればよい。募ってくるのは「迷信」ではなく恐怖感である。なおすでに述べたように吉田健一の訳も同じように解釈される危険がある。最後の(7)は訳し上げも含まれ、文の体をなしていない。「妖氣」の結束性も弱い。

河野一郎(訳)(1969/1974)「アッシャー家の崩壊」(『ポオ小説全集 1』)(創元推理文庫)

(1)すでに述べたように、沼の中をのぞきこむといういささか子供じみたわたしの試みの結果は、かえって最初に受けた奇怪な印象を深めるばかりであった。急速に頭をもたげてくる迷信めいた気持ちを—どうして迷信と呼んで悪いはずがあろう?—意識したことが、(2)明らかに(3)疑念を募らせる結果になったのだ。これが恐怖を根底におくすべての感情に共通な、逆説的法則であることは、(4)わたしも前々から知っていた。沼に映った影からふたたび現実の屋敷に目を転じたとき、わたしの胸の中に奇妙な幻想がきざしてきたのも、(5)これが原因であつたに違いない—実に他愛もない幻想であり、わたしもただ、(6)重苦しくのしかかってくる恐怖の強さを示したいがために述べるにすぎない。わたしは想像をたくましくし、この館と地所にはこのあたりに特有の妖気が—朽ちた木や、灰色の壁や静まり返った沼から立ちのぼる、空の 대기とは似ても似つかぬ妖気が—どんよりとよどみ、ほとんど目にもつかぬ鉛色の、毒をふくんだ神秘的な蒸気が—たれこめていると(7)信じこむにいたつたのだ。(338)

(1)の“I have said”だけ、主節を順送りに訳しているが、(4)(5)は主節を訳し上げ、(6)は不定詞句を訳し上げている。最後の文も同格節を訳し上げており、そのために「想像をたくましくし」と「信じ込むにいたつたのだ」の呼応関係が弱くなっている。(2)の「明らかに」は“*There can be no doubt*”に対応すると思われるが位置がおかしい。(3)の「疑念」という訳語はどこからきたのか不明。(7)は主節の主部を順送りにしたものの、述部を訳し上げている。

小泉一郎(訳)(1969)「アッシャー家の崩壊」(『世界文学全集 14 黄金虫 黒猫 緋文字』)(講談社)

(1)すでに述べたように、わたしのいささか子供じみた試み—沼のなかをのぞきこむというあの試みの結果は、最初の異様な印象をいよいよ深めるだけだった。(2)あきらかに、わたしの迷信めいた気持ち—そう呼んでわるい筈はあるまい—が急速につのってくるのを意識したそのことがまた、わたしの迷信めいた気持ちをさらにつのらせるのに役立ったのだ。これが恐怖というものを根底におく一切の感情のもつ逆説的な法則であることを、(3)わたしは久しい以前から知っていた。沼にうつっているその映像から館へと目をあげたとき、わたしの胸に奇妙な妄想がうかんできたのも、(4)ひとえに右のような原因によるのかも知れない—(5)実に奇妙な妄想であって、わたしに重苦しくのしかかってくる感覚のなまなましい力を示したいためにだけ、(6)ここにそれを述べてみるのにすぎない。この館と所領の全体には、館とその付近に特有のある雰囲気がまつわりついているのだ—天空の 대기とは似ても似つかぬ雰囲気、朽ち果てた樹木や灰色の壁やひっそりした沼からたちのぼる瘴気、どんよりとして物憂く、鉛色をして、かすかにそれと認め得るほどの、毒気をふくんだ神秘的な濛気がただよっているのだ—(7)わたしは自分の想像力をはたらかせて、こんなことを実際に信じる気持ちになっていたのである。』(96-97)

(1)「すでに述べたように」や(2)「あきらかに」のように、順送りの箇所もあるが、「I have long known」と(4)“it might have been for this reason only”は訳し上げである。後者の場合、訳し上げによって“a fancy”と同格の“a fancy”の結束性が弱まっている。また only は訳されていない。(5)の「妄想」は前文が訳し上げられているために、結束性が弱まり、前方指示もない。もっと大きな問題は、(6)“I had so worked upon my imagination as really to believe that…”の that 以下をすべて訳し上げていることである。

刈田元司(訳)(1969)「アッシャー家の崩壊」(『黒猫・黄金虫』)(旺文社文庫)

さて、(1)すでに述べたように、館を水鏡にうつしてみるといっささか子供っぽい私の実験も、はじめに覚えた妖しい胸さわぎをいっそうたかぶらせるのがおちであった。(2)そして、この迷信じみた気の迷い—と言ってもさしつかえあるまい—が、いやましにつのってゆくのを自分で意識すると、それはかえって妄想に拍車をかけるばかりであった。(3)前から知っていたことだが、恐怖心に根ざすいっさいの感情は、そのような逆説的な法則に従ってたかぶってゆくものである。そしてたぶんそのようなわけで、水鏡から目を上げてほんものの館を見上げたとき、私の頭に一つの妙な幻想がうかんだのだと思う。(4)それは全くおかしな幻想で、ここにそれを書き記すのも、ただこのとき私を襲った物狂おしさの程度を示そうためにほかならない。(5)つまり、私はいつのまにか空想をたくまじゅうして、館とその敷地、そしてそれをめぐるあたりいちめん、妖気がただようのが見えると思ったのである。天空のさわやかな大気とは似ても似つかぬ、重く、どんよりした、かすかにではあるが見きわめのつく、鉛色の毒気のようなものが、朽ち木と、灰色の石の壁面と、よどんだ沼からたちのぼる、(6)と見たのである。(40)

順送り(1)(3)(4)の3箇所ある。(2)の「妄想」は“the increase”に対応するのであろうが、「迷信じみた気の迷い」と取られても仕方がない。なお(2)では“There can be no doubt that”が脱落している。(5)の「私はいつのまにか空想をたくまじゅうして」は単純化。(6)は不要な訳し上げである。

丸谷才一(訳)(1971 S46)「アッシャー館の崩壊」(『新集世界の文学 7 ホーソン ポー』)(中央公論社)

わたくしがいささか子供っぽい実験をしても—黒い湖を覗きこんで見ても—それとでもただ最初の奇怪な印象を深めるだけであったという事情については(1)すでに記した。(2)このような迷信じみた思い—そう名づけてはいけなから?—が急に募ってくるのを意識すると、そう意識することがかえってますます迷信じみた思いをかきたて、昂じさせるのであったが、これこそは(3)わたくしがかねがねわきまえていた、恐怖にもとづくあらゆる感情に共通する逆説的な法則なのである。そして、水面に映る映像から館それ自体へと瞳をあげたとき、心のなかに異様な妄想が湧き起ったのも(4)このために

過ぎぬかもしれない—それはあまりにも荒唐無稽なものであって、(5)今あえて言及するのは、ただ単にそのときどれほど力強い興奮がわたくしを悩ましていたかを示す一助としてなのだけれども。(6)すなわち、館と周囲の地所全体が、それらおよびそれらに近接したものに独特の大気—天空の大気とはまったく異なる、朽ちた樹木や灰いろの壁や静寂きわまる湖の莫いを帯びた大気—仄かにしか認めることのできぬ、鉛いろに淀んだ、悪疫をもたらす恐れのある謎めいた瘴気によって覆われているのではないかという想念にわたくしは耽り、また、それを信じかけていたのである。(278)

(1)は訳し上げのせいで、「主節の格下げ」による「従属節の前景化」という効果を再現できていない。(2)では主節”There can be no doubt”が脱落している。(3)は一応順送りになっている。(4)は訳し上げで、「妄想」←「それ」の結束性が弱くなっている。(5)は不定詞句を順送りにしている。(6)「すなわち」は一つの解釈として成り立つだろう。(7)は長大な訳し上げであり、きわめて分かりにくいだけでなく、先行詞が an atmosphere という不定名詞であること、意味の重点が関係詞節にあること、同格による説明の追加を考慮していないなど、原文の意味を再現しているとは言い難い。

小川和夫(訳)(1975 S50)「アッシャー家の崩壊」(『世界文学全集 26 ポオ ボードレル集』(筑摩書房)

(1)先に述べたように、沼の中を見おろしてやろうという、やや子供じみた私の実験も、最初の奇妙な印象を深めただけであった。(2)疑いもないことは、自分の迷信—そう呼んでいけない理由がどこにあるか—が急速に増大してくると意識したことが、何よりもその増大に拍車をかけるものとなったのである。(3)私は久しい以前から知っているが、恐怖にもとづく感情には、すべてこのような逆説的な法則が存在しているのである。(4)そしておそらく単にそのような理由によるのかも知れぬが、私が池に映じている影から家そのものへと再び眼をあげたとき、私の心中には奇妙な妄想が湧きあがってきたのであった—(5)それは実際ばかばかしい妄想なので、(6)私がことさら今それを述べるのも、ただそのときに私が受けた重苦しい感じがどんなに生々しかったか、それを示したいために他ならない。つまり、(7)私は自分の想像力を烈しく掻きたてていたので、この邸と地所一帯には、それ自身とそのすぐ近辺にあるものに特有な一種の霧囲気が垂れこめている—空の大気とは何の縁も持たぬ、朽ちた木々や灰色の壁や黙した沼から湧きあがってきた一種の霧囲気が—どんよりと鈍い、ほとんど見分けのつかぬ、鉛色の、神秘的な瘴癘の気が、垂れこめていると、(8)心から信ずるようになっていたのである。(94)

(1)以降は最後の文を除いて順送りであり、読みやすい、優れた訳である。しかし最後の部分は同格までも訳し上げになっており、「私は自分の想像力を烈しく掻きたてていた」から「心から信ずるようになっていた」までの距離が大きくなり、読者の述部に対する期待は次々に遅延させられることになる。

富士川義之(訳)(1992)「アッシャー館の崩壊」(『黒猫』)(集英社文庫)

(1)前に述べたように、わたしのいさか子供じみた試み—つまり沼のなかを覗き込もうとする試み—は、最初の異様な印象をいっそう深めるばかりであった。こうした(2)不合理な恐怖—そう名づけてならぬ理由などないはずではないか?—が急速に募って来るのを意識すればするほど、ますますその不合理な恐怖が募って来ることは(3)明らかである。これこそ、(4)わたしが久しい以前より知っている、恐怖に基くすべての感情に見出せる逆説的な法則なのである。そして、水面に映るその映像から館そのものへとふたたび眼を向けたとき、わたしの心のなかに奇妙な空想が生じたのも、(5)ようするにこのような理由のためだけなのかもしれない—それは実際、あまりにも途方もない空想なので、(6)いまそのことに言及するのも、ただ単に、その際わたしに重くのしかかっていた感覚のなまなましい支配力を示したためにほかならないのだ。つまり、この館や周囲の地所全体には、館とそれに近接したものに特有な一種の大気—大空の大気とは似ても似つかぬ、朽ち果てた木々や灰色の壁や静まり返った沼から立ち昇ってくる大気—どんよりと濁んで不活発な、かすかにしか認めることのできぬ、鉛色をした、有毒で謎めいた瘴気が立ちこめているのではないか(7)と想像し、しかもそれを本当に信じようとした、ということなのである。(42-42)

(1)は順送り。(2)、(3)は訳し上げであり、特に(3)では太線部の述部が焦点化されてしまった。なお富士川は superstition に「不合理な恐怖」という訳を与えている。ひとつの見識であろう。(4)は波下線で示した主節の部分を、「逆説的な法則」の形容語句に変えている。これは順送りとはいえない。(5)は訳し上げ。(6)は不定詞句を順送りにしている。(7)は大きな訳し上げであるが、主節の部分“I had so worked upon my imagination as really to believe that”を「と想像し、しかもそれを本当に信じようとした」とするでは不十分であろう。

岡田柁(1996)「アッシャー館の崩壊」(『ポーの黒夢城』)(大栄出版)

沼をのぞくという子供じみた試みをした結果、不気味な印象が強まっただけだったことは(1)すでにお話した。(2)迷夢とでも呼ぶべきものは、募ってくるさまを意識したときから加速度をつけて大きくなる。(3)恐怖に基づくあらゆる感情にあてはまる逆説的な法則と言えよう。沼に映った影から再び館に視線を戻したとき、私の心に奇妙な幻想が浮かんだのは(4)そのせいかもしれない。

(5)それはあまりにもばかげた幻想なのだが、私の恐怖感がどれほど鮮烈であったかを示すためにお話しておこう。(6)館のあたりいったいに、妖気が立ちこめていたのだ。大空の大気とは似ても似つかぬ気体で、朽ちた木と、灰色の壁、静まりかえった沼からたちのぼる、ほとんど目に見えない鉛色の霧のようなものだ。鈍くどんよりとして、不気味な毒気を含んでいる。」

(1)は主節と従属節が逆転しており、“sole”や“first”の意味が反映されていない。(2)は主節を省略しているだけでなく、従属節も大幅に単純化している。(3)も“Such”を訳さず、主節を無視しており、結

束性が悪くなっている。(4)も主節と従属節が逆転している。(5)では不定詞句が約仕上がられている。(6)では、“I had so worked upon my imagination as really to believe”が脱落。脱落が多い杜撰としかいいようがない訳である。

大岡玲(訳)(1998)「アッシャー家の崩壊」(『アモンティラードの樽その他』(小学館))

(1)すでに述べたように、沼に映った館の影をのぞきこむという子供じみたころみのために、かえって私が最初にうけた奇怪な印象は強まってしまった。そして、(2)急速に頭をもたげてくる迷信じみた気の迷い—どうして迷信とよんで悪いはずがあるだろうか?—に意識的になったせいで、いっそうそれを高ぶらせてしまった。

これが、恐怖に根ざしたすべての感情によく生じる、逆説的な法則であることは、(3)ずっと以前から私も知っていた。沼から館のほうにふたたび視線を戻した時、私の脳中にまったくおかしい幻想がきざしてきたのは、(4)まさしくそのためであった。(5)その幻想は笑うべき馬鹿ばかしさに満ちていたが、(6)私をおそった感情のなまなましい強さを示したいばかりに書きとめておくのである。

私はいつのまにか想像をたくましくして、館と敷地には、そのあたりに特有の妖気—(7)朽ち果てた木や灰色の壁、静まりかえった沼から立ちのぼる、ふつうの空気とは似ても似つかない、どんよりとよどんだ、かすかに灰色を帯びた毒を含むなぞめいた蒸気がただよっている、と信じこんだ。(173-174)

(1)は順送り。(2)では主節の“*There is no doubt*”が脱落している。(3)と(4)は主節と従属節が逆転する訳し上げ。(5)の「その幻想は…」の訳文は、“*so ridiculous...that...*”の意味合いを伝えていない。(6)では不定詞句を訳し上げている。(7)も、原文の“*so...as...to...*”を生かしておらず、著者が読者の意識を誘導するために考えた工夫が無駄になっている。また同格節を訳し上げているため「蒸気」にかかる形容語句が長くなっている。

金原瑞人(訳)(2002)「アッシャー家の崩壊」(『モルグ街の殺人事件』(岩波少年文庫))

(1)前にもいったように、沼のなかをのぞくという子どもっぽいことをしたせいで、最初に感じたあの不気味な印象はさらに強まった。(2)迷信っぽい考えが—迷信としかいいようがない—(3)どんどんふくらんでいくのがわかってくると、ますますそうになってしまう。前々からわかっていたことだが、(4)恐怖に根ざした感情と言うのは、そういうものだ。だから、わたしがふたたび目をあげて建物をみたとき、奇妙な想像をしてしまったのも、(5)おそらくそのせいだろう。(6)まったくばかばかしい想像だったのだが、ただ、わたしにつきまとっていた重苦しい感じがどれほど強烈だったかを示す例として書いておこう。(7)わたしは想像力を働かせすぎたせいで、こんなふうに思いこんでしまったのだ。この建物とそれを取りまく土地は独特の大気におおわれている。(8)空の大気とはまったくちがひ、朽ちた木や、灰色の壁や、静まりかえった沼などから立ち上ってくる。それは毒気をふくんだ不気味な蒸気のようなもので、鈍く、けだるく、ほとんどそれとはわからない、鉛色の大気だ。(66-67)

(1)は順送り。(2)では主節 “There can be no doubt”が訳されていない。(3)「どんどんふくらんでいく」は “to accelerate the increase itself”の訳としては弱すぎる。(4)は単純化で paradoxical が訳されていない。(5)は主節と従属節が逆転する訳し上げ。(6)は結束性が不足しており、不定詞句の訳し上げもある。(7)は順送り。(8)は結束性が弱い。

八木敏雄(訳)(2006)「アツシャー家の崩壊」(『黄金虫 アツシャー家の崩壊他九篇』)(岩波文庫)

沼を覗き込んでみる—といった、いささか子供じみた試みの唯一の効果が、最初の奇怪な印象を補強するだけに終わったことは(1)すでに述べた。(2)ただ確かなことは、私の迷信かつぎ—そう呼んでいけない理由などどこにあるか?—が急速にその度を加えつつあるのを意識したことが、(3)そうした傾向そのものを増大させるのに大いに(4)貢献したということである。(5)つとに私の承知していたところではあったが、そういうことこそ、根柢に恐怖を秘めるあらゆる感情についての逆説的法則である。そして、水面の映像から、私が目を再び建物そのものに移したとき、奇妙な幻想が私の心中に湧き起ったのは、(6)ひとえにこの理由によるに相違なかった—(7)かくも不可解な幻想についてわざわざここで言及するのも、そのとき私を圧倒した感情の熾烈さについて行っておきたいからに他ならない。(8)想像力がどう働いたものか、とにかく私は本気で信じ始めていたのだ—建物と敷地の辺り—帯に、それらとその周辺の土地に固有なガスが滲んでいることを—また、そのガスが空の大気とは無縁で、朽ちた木、灰色の壁、ひそまり返った沼などから滲み出て来るもの—どんよりした、動きの鈍い、微かに目につくばかりの鉛色をした有毒の神秘的な蒸気であることを。(170-171)

(1)は主節と従属節が逆転する訳し上げ。(2)は順送り。(3)の「そうした傾向」が何を指すか明らかではない。(4)の「貢献した」という訳語は、八木(1971)の訳では「寄与した」になっており、こちらのほうがよい。(5)は順送り。(6)の「ひとえにこの理由によるに相違なかった」は訳し上げで、原文の “And it might have been for this reason only” に対応するが、「相違なかった」では意味がややずれる。(7)は不定詞句を順送りにしている。(8)の文は順送りであるが、述語動詞「信じ始めていたのだ」を出すのが早すぎたため、目的語を倒置するはめになっている。ここは通常の語順でよい。

*なお八木は「ガス」に注を付し、OED からの語釈を述べた後、「ボオがこの作品を発表したころには、“atmosphere”という語の比重は物理的な「蒸気」や「ガス」のほうにあったと考えてよからう。また「そのガスが空の大気とは無縁」と強調されていることにも注意したい」(380-381)と書いている。

西崎憲(編訳)(2006)「アツシャー家の崩壊」(『エドガー・アラン・ポー短編集』)(ちくま文庫)

(1)すでに述べたように、わたしのいわば子供じみた実験—湖面を覗きこんだこと—の結果はただ最初の不可解な印象を強めるのみに終わった。(2)迷信めいた不合理な不安が急速に増大していることについては—迷信という語を用いてはいけない理由があるだろうか—増大しているという事実自

体がそれに拍車をかけていることは疑問の余地がなかった。ずいぶん前から(3)そのことには気づいていたのだが、そうした作用は、根底に恐怖があるすべての感情に共通する逆説的な法則と言うべきものだった。そして水面に映った像から眼を上げてもう一度館を見た時、奇妙な空想が心に湧いたことを(4)説明する唯一の理由は、あるいはその不安の増大だったのかもしれない—実際、それはあまりに野放図な空想だった。(5)わたしを圧迫したその感覚が具えていた迫真性については少々説明してもいいかもしれない。(6)あまりに館と地所に関して想像力を働かせすぎたせいか、わたしはついに館や地所やその周辺が特別な気体に包まれているのではないかと本気で思うようになったのである—特別な気体、それは大気とは関係がなく、腐敗した木々や灰色の壁や深閑とした湖から立ちのぼるもの—有害で、得体のしれない蒸気のようなものだった。鈍く、重く、微かだが眼に映じるほどの、薄い灰色の。(157-158)

(1)は順送り。(2)では、superstition を「迷信めいた不合理な不安」とした点は評価できる。しかし文全体は主節と従属節が逆転する訳し上げである。「事実」は「意識(したこと)」であろうし、「それ」が何なのかもわからない。(3)の「そのこと」は結束性が十分ではない。(4)は(2)と同様の訳し上げである。(5)は不定詞句を訳し上げているが、そもそも原文の意味とずれている。(6)は妥当な順送りの訳になっている。最後の部分は名詞止めと倒置になっているが、そうする必要はない。

巽 孝之(訳)(2009)『黒猫・アッシャー家の崩壊』(新潮文庫)

(1)すでに述べたように、いささか子供っぽい試みとは感じながらも、沼の内側を見下ろしてみ、けつきよく最初の奇妙な印象が深まるばかりであった。わが迷妄がますます増大していくのをひとたび意識してしまうと—「迷妄」というよりほかに表現しようがないのだ—まさにその増大感覚自体が抑えようもなくふくれあがるばかり。これこそは恐怖にもとづくありとあらゆる情緒の逆説的な法則であることは、(2)永く熟知するところだ。そして、(3)まさしくこうした理由のために、わたしが沼に映る屋敷の映像から実際の邸自体へ視線を移し見上げたとき、心のうちにおかしな空想が頭をもたげてきたのだ。(4)じつにばかばかしい空想もないので、これにふれば、わたしにのしかかっていた感情がいかに強烈な猛威をふるっていたかがわかるであろう。わたしは想像力の翼を拡げるあまり、この屋敷全体と領地のまわりに、それらと近隣地域特有の(5)霧囲気が漂っているものと信じ込むようになっていた。その霧囲気は天の国のものとはいささかも似つかぬものの、朽ち果てた樹木から、灰色の壁から、そして物言わぬ沼からにじみ出てくる空気、危険で怪しげなガスにも似て、物憂く淀み、かろうじて気がつく程度の、鈍色の空気であった。(159-160)

(1)は順送りではあるが、“the sole effect”の訳を省略している。しかしその必然性はない。(2)は主節と従属節が逆転する訳し上げ。「迷妄」と言う訳語には疑問が残る。(3)は“might”の意味合いを捉えていない。(4)は順送りにはなっているが、読者によっては意味がつかめないかもしれない。(5)では“an atmosphere”を「霧囲気」と訳しているが、「気体」が妥当だろう。実際、巽も後では「空気」を使っ

ている。最後の波下線部の箇所は同格の処理に疑問が残る。

小川高義(2016)「アツシャー家の崩壊」『アツシャー家の崩壊/黄金虫』(光文社古典新訳文庫)

いささか子供じみた実験をしたら—つまり沼をのぞき込んだら—おかしな第一印象を深めるだけになったことは、(1)すでに述べたとおりだ。私は急速に迷信にとらわれていたのだが—そう、まったく迷信と言ってよかろうが—その急速な変化は、意識してしまった分だけ、なおさら急変となったに(2)違う。およそ恐怖感を下敷きとする心理にそのような逆説が作用することは、(3)とうに私も承知している。水面の映像から目を上げて、ふたたび館の本体を見た私の心に、いかにも奇怪な幻想が生じたのは、(4)そんな理由によるだけだったかもしれない。(5)そう、あまりに突飛なことだ。ひしひしと迫ってくる気配が、あまりに強烈なものだったと言うにとどめよう。自分で想像をめぐらすうちに、すっかりその気になってしまって、この館の一带、付近の領域には、ほかにはない変わった空気が瀰漫していると思ったのだ。いわば天空の大気とは縁もゆかりもなく、あたりで立ち枯れる木々、くすんだ壁、静まり返った沼から、じわじわと滲みだした毒気、得体の知れぬ妖気である。どんより淀んで、わずかな気配として漂い、鉛色を帯びている—。(12)

(1)(2)(3)(4)は主節と従属節が逆転する訳し上げである。(1)にある「急速な変化」「急変」という訳語は“rapid increase”の意味からずれている。(5)の「あまりに突飛なことだ。ひしひしと迫ってくる気配が、あまりに強烈なものだったと言うにとどめよう」の部分は、前方との結束性と、この2文間の結束性が失われており、ばらばらな印象を与えるし、何よりも大げさである。「奇怪な幻想」とは結局、館近辺の空気が他と違うというだけのことなのだから。「すっかりその気になってしまって」はよく考えればわからなくもないが、なぜそう訳すのか理解できない。「ほかにはない変わった空気」は過剰なパラフレーズ。

鴻巣友季子訳(2016)「アツシャー家の崩壊」『E・A・ポー(ポケットマスターピース09)』(集英社文庫)

(1)先ほど、沼面を見おろすといういくぶん幼稚な試みをしたところ、初めの奇怪な印象を深めるばかりだったと言った。(2)なんだか迷信じみた考えが—これを迷信と呼んでいけないわけがあるか?—むくむくとこみあげてきたのだが、それを意識したせいで、(3)ますます気持ちが悪いほうへ傾いているにちがいない。(4)とうに知られたことだが、恐怖を土台としたあらゆる感情を統べる逆説的法則とはかくなるものである。(5)ひとえにそのせいだろう、沼面に映った像から目をあげて実物の屋敷を見ると、心に妙な妄想が湧きおこった—(6)あまりに馬鹿らしい妄想であり、あえてここに記すのは、わたしを苦しめていた知覚の生々しい力を(7)説明するために他ならない。わたしは想像力をたくましくするあまり、実際、この屋敷と地所のまわりには、この近辺だけに特異な雰囲気すが漂っていると思いきままでになっていたのだ—(8)ちなみに、それは天国の空気とは縁遠く、立ち枯れた木々や、くすん

だ壁や、森閑とした沼から沁みだしたもの—それとは気づきにくい、謎めいた、伝染性の蒸気が、どんよりとの憂くたちこめ、あたりを鉛色に染めている—そんな気がした。」(304)

(1)は「先ほど」だけは順送りだが、主節を訳し上げている。(2)の「なんだか」は一見“*There can be no doubt*”に対応しているように思われるが、文末に「にちがいない」とあるから、やはり主節と従属節が逆転する訳し上げである。「なんだか」の出所はわからない。(3)の「ますます気持ちが悪いほうへ傾いている」は過剰翻訳に近い(原文は“*the consciousness of the rapid increase of my superstition (...) served mainly to accelerate the increase itself*”であり、意味のずれが生じている)。一方で(4)「どうに知られたことだが」、(5)「ひとえにそのせいだろう」、(6)の同格節は順送りになっている。(6)の「知覚」という訳語はやや意味がずれている。(7)は不定詞句を訳し上げている。(8)の「ちなみに」は本筋から離れたことを言い添えるという意味だから、ふさわしい訳語とは言えない。この同格節はそれこそ「本筋」である大気をさらに詳しく説明するものだからだ。「あたりを鉛色に染めている」も過剰翻訳。最後の「そんな気がした」は、それまでの訳を締めくくるための策であろうが、普通に訳していけば必要のないものである。

河合祥一郎(2022)「アッシャー家の崩壊」(『ポー傑作選 1 ゴシックホラー編 黒猫』)(角川文庫)

湖を眺め下ろすという些^{いさ}か子供じみたことをしたところ、奇妙な第一印象を深めるばかりだったことは(1)既に述べた。(2)自分の迷信がいよいよ強まっていくのを意識してしまうと—迷信としか呼びようがないだろう?—なおのこと迷信は強まってしまう。畏怖にもとづいたあらゆる感情には、そうした矛盾したところがあるものだと、(3)私は昔から気づいていた。水面から目を上げてふたたび家を見たとき、心に奇妙なイメージが生まれたのは、(4)そんな思い込みのせいにすぎなかったのかもしれない。(5)実に馬鹿げたイメージであり、ここに記すのも、(6)そのせいでどっと気が滅^{めい}入ったためにほかならない。(7)想像を逞^{たくま}しくするあまり、私はこの屋敷と領地全体とに一種独特の雰囲気がまわりついていると本気で信じてしまったのだ。それは、天国の空気とは一切関わりのないような、腐った木々や灰色の壁、そして静まり返った湖から醸^{よど}し出される、(8)どんよりと濛んだ、なんだかよくわからない、鉛色の、感染力を持つ謎めいた蒸気だった。(168)

(1)は訳し上げ。(2)は主節の“*There can be no doubt*”を訳していない。波下線部「なおのこと迷信は強まってしまう」は原文“*served mainly to accelerate the increase itself*”の“*accelerate*”の意味を反映していない。(3)(4)は訳し上げであるが(4)で「思い込み」が何であるか、読者にはわかりにくい。原文では *reason* であるから、「最初の陰鬱な印象が深まった」そして「恐怖感が急速に増大したことを意識すると増大のスピードが加速した」ことを指しているのであり、「思い込み」という訳語が生じる余地はない。(5)は前文との結束性が弱い。(6)は単純化。(7)は順送りになっている。(8)は同格の部分の順送りになっているが、内部では順序を入れ替えている。

The Fall of the House of Usher はこんなふうには訳されてきたのである。これだけの分析ではあるが、ある程度の外挿が許されるならば、訳し上げの規範はやはり強力であるということができよう。

.....

【著者紹介】

水野 的(MIZUNO Akira) 東京外国語大学ポルトガル=ブラジル語学科卒。元青山学院大学文学部英米文学科教授。2014年-2018年日本通訳翻訳学会会長。著書に『同時通訳の理論』(朝日出版社)、共編著に『日本の翻訳論』(法政大学出版局)。

.....

【文献】

水野 的(2019)「柳父翻訳学の可能性」 http://jaits.web.fc2.com/precon_2019.pdf なお配布資料は <http://jaits.web.fc2.com/Handout.pdf>

水野 的(2023a)「順送りの訳とは何か—訳読史の視点から」石塚浩之編『英日通訳翻訳における語順処理: 順送り訳の歴史・理論・実践』(ひつじ書房)

水野 的(2023b)「順送りの訳と情報構造」石塚浩之編『英日通訳翻訳における語順処理: 順送り訳の歴史・理論・実践』(ひつじ書房)

Irwin, J. J. (2006). *Unless the Threat of Death is Behind Them: Hard-Boiled Fiction and Film Noir*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press.

MITIS Journal of Translation and Interpreting Studies 投稿規定

1. 投稿の資格

著者(筆頭著者および共著者)が MITIS の研究員*であること。ただし編集委員会が認めたもの、あるいは編集委員会から依頼された原稿はこの限りではない。

*研究員になるためには、(1)氏名 (2)所属・職名(フリーランスの場合はその旨を明記) (3)略歴(5～10行程度) (4)研究分野 (5)必要な場合は郵便物転送用の住所 (6)推薦者 1 名(いなくても可)を記したメールを水野のメールアドレスまでお送り下さい。(a-mizuno@fa2.so-net.ne.jp)審査の上決定します。

2. 原稿の種類

原稿の種類は、研究論文、研究ノート、報告(実践、調査、学会等)、資料、エッセイ、書評等である。

3. 投稿の方法

- 1) 投稿は電子メールに添付して送付する。
- 2) メールを送付先は、MITIS Journal of Interpreting and Translation Studies 編集委員会とする。メールアドレスは a-mizuno@fa2.so-net.ne.jp
- 3) メール本文中に、提出日、論文題目(日本語論文の場合は英文の題目も明記する)、所属・職名、著者略歴、電子メールアドレス、電話番号を記載すること。

4. 原稿執筆要領

- 1) 投稿原稿は原則として Word ファイルで作成することとする。
- 2) A4 判横書きで、字数・行数は 38 字×37 行、フォントは日本語が MSP 明朝、英語は Times New Roman とし、いずれも 10.5 ポイントを使用する。
- 3) 投稿原稿の長さは本文、文献、図表を含めて 20 枚以内とする。但し編集委員会が認めたものはこの限りではない。
- 4) 使用言語は日本語ないし英語とする。
- 5) 論文と研究ノートの場合、日本語の原稿には英文アブストラクトをつけること。長さは 200 words 以内とする。(英文原稿の場合も同様。)
- 6) 脚注境界線以外の線を絶対に入れないこと。
- 7) ページ番号を入れないこと。

5. 原稿の採否

- 1) 投稿原稿の採否は、査読を経て編集委員会が決定する。
- 2) 採否の通知は投稿者へのメールによって行う。
- 3) 査読の結果修正を求められた場合、修正原稿は編集委員会が定めた期日までに再提出すること。期日までに再投稿されない場合は、投稿を取り下げたものとみなす。大幅な修正が必要とされる場

合には、改稿の上次号に再投稿するようすすめることがある。

- 4) 査読委員あるいは編集委員会の判定により、原稿の種類の変更を著者に求めることがある。これは主に研究論文と研究ノートの間の変更になる。
- 5) 最終投稿原稿を受け付けた時点をもって「受理」とする。
- 6) 著者校正は一度のみ行う。(この時点は語句の誤りの訂正などにとどめ、それ以上の加筆修正は認めない。)

6. 著作権

掲載された著作物の著作権は本誌に所属する。ただし著者は非営利目的で複製し、翻訳することができる。その場合はその著作物が本誌に掲載されたものであることを明記すること。

7.その他、文献の表記などは暫定的に『通訳翻訳研究』の投稿規定にあるものを参照して下さい。

<研究倫理について>

*執筆にさいして考慮すべき研究倫理について以下に一般的な指針を述べますが、大学等研究教育機関に所属されている方は、当該大学ないし機関で設けている研究倫理指針に従って下さい。

○論文として投稿する際には適正な倫理的配慮が行われていなければならない。

1. 論文投稿においては捏造、改ざん、盗用などの不正行為は認められない。
 - 1a. 捏造とは、存在しないデータ、研究結果、文献などを作成することを言う。
 - 1b. 改ざんとは、研究資料、研究プロセスを変更して、得られた結果を加工することである。
 - 1c. 盗用とは、他の研究者などのアイデア、方法、データ、結果、論文の内容などを、了解を得ないで、あるいは適切な表示なしに流用することを言う。
2. 以下のような不適切な発表方法をとらないこと。
 - 2a. 二重投稿:著者自身がすでに公表していることを告知せずに、同一内容の原稿を投稿し発表することを言う。
 - 2b. 業績の水増し:既発表の論文に内容が類似し、その論文を発表することの意義を認めるのが困難で、査読を担当する研究者に無用な手間を強いるような原稿を投稿すること。
 - 2c. 利益相反 Conflict of interest:経済面での利益や損失などの利害関係のために、論文の客観性に影響を与えたり、あるいは与えるおそれがあるとみなされたりすることを言う。
3. 著作権
 - 3a. 著作権に関する規定やガイドラインを参照し適切に利用すること。
 - 3b. 他人の著作物(図表を含む)を利用する場合には著者の了解が必要である。著作権が出版社などにある場合は出版社の許可が必要になる。
 - 3c. ただし著作権法の保護対象外の著作物、保護期間終了後の著作物、許された目的と範囲内での

引用、教育や試験のための利用は著作権者の了解は不要である。

3d. 引用は適切に行う(出典の明記など)。

4. インフォームド・コンセント Informed consent

被験者を使う場合、研究者は被験者に対し研究について事前に十分な説明を行い、その意義、目的、方法を理解させ、被験者となること及びデータ等の取り扱いに関して被験者の自由意志に基づく同意を得ていなければならない。

5. 個人情報の保護について

5.a 研究を公表する際には被験者を特定できないようにすること。

5.b インフォームド・コンセントを得る際に説明した以上の個人情報を取得しないこと。

5.c 個人情報を不正な手段により取得しないこと。

5.d 個人情報が漏洩しないよう安全管理を行うこと。

*詳しくは、日本学術振興会「科学の健全な発展のために」をご覧ください。

<http://www.ritsumei.ac.jp/research/file/rinri.pdf>

編集後記

MITIS Journal 6 号をお届けします。

諸般の事情で発行が一か月遅れました。

第 6 号にも論文はありませんが、三ツ木さんの力のこもった連載が始まりました。全 6 回の予定です。AI 翻訳がしきりに取り上げられる昨今ですが、このような精緻な読みがいつの時代も優れた翻訳の基礎にあるのだと思います。北代さんの解題は、春陽堂刊『伊曾保物語』の「序詞」と「伊曾保物語の考」という、埋もれた翻訳論を紹介しています。新しい翻訳論アンソロジーの姿が徐々に見えてくるような気がします。水野のエッセイはもう一例だけ分析してとりあえず区切りをつけておこうというものです。翻訳例がこれぐらいになってくると收拾がつかなくなるため、何か特定の視角から分析する必要がありそうです。

前回お知らせしたとおり、2 月に石塚浩之(編)(2023)『英日通訳翻訳における語順処理—順送り訳の歴史・理論・実践』(ひつじ書房)が出ました。高価な本ですが大方の図書館にはすでに配架されていることと思いますので、是非手に取ってごらんください。目次は以下のひつじ書房のサイトで見ることができます。<https://www.hituzi.co.jp/hituzibooks/ISBN978-4-8234-1176-2.htm>

次号の締め切りは 2023 年 10 月末日です。多くの投稿をお待ちしています。

2023 年 5 月 10 日
編集長 水野 的

水野翻訳通訳研究所 (MITIS)
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-3-3
パレス御茶ノ水 1 号館 402
a-mizuno@fa2.so-net.ne.jp
<https://mitis.webnode.jp/>